

おばあの水晶玉

coltysolty

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

おばあは推定年齢2500才。おそらくBCから生き続けている。癒しのおばあ？必殺仕事人おばあ？ヒーローみたいなヒロインおばあ？おばあのは力は果てしない。愛に飢えている者、人生を顧みたい者、最後は心から悔い改めて全てのことを謝罪したい者。

天寿を全うしてもらおうお手伝いをキジムナーと共に行っていく。

おばあとキジムナーの時空を超えた旅が始まる。

## 目次

遙かなる旅の始まり「序章」	1
成敗された悪代官	3
浄化の邪魔者	7
あーゆーれでい？あめりきやんVol. 1	10
あーゆーれでい？あめりきやんVol. 2	12
サグラダ・ミリア	16
ラルドの聖布	19
ばいばい	23
兵どもが夢の後	26
お忘れなく	30
おばあのバイト	32
キジムナーの休暇	35
愛は永遠	37
相棒の誕生話	43
年度末浄化	46
啓蒙プラン	48
GWスペシャル	51
メンテナンス中	57
大切な日なの？	61
6次元ポケット	64
かなへび	67
遊べないこども	69
お盆アカデミア	72
夏風邪舞台	74

## 遙かなる旅の始まり 「序章」

森のおばあは、長い間世の中をみてきた。もう自分の年が数えられない程生きている。推定2500才ぐらいなのだろうか？紀元前から生きている計算になる。ずっと生き続けることがいかにつらいか、生き続けた者にしかその悩みはわからない。おばあは紫水晶を覗くと、これまでのすべての出来事が映し出される。陰で悪行三昧しつづけた者、欺瞞に満ちあふれ益を独占した者、人を陥れようとした者。人は生まれながらに罪人であるが、その罪を悔い改めなければ、永遠にシエロを知ることはない。

おばあはヨタの森に住み、キジムナーと暮らしていた。これまでいろんな人、いろんな事をみてきたが、人間とはなんともおぞましいものだろうか、心を痛める毎日だった。正しく弱い者は虐げられ、権力をかさにきて思い通りに人を動かそうとする者が牛耳る世の中。理不尽な世の中は救いがないのだろうか。

シエロに入り、ディオスの元に到達できる者は、全ての罪を心から悔い改め、魂を清めた者のみであるのに。人が傲慢になったのはいつからだろうか。科学の発展は絶対的な存在であるディオスを超えると慢心しはじめたのはいつからなのだろう。

ただしこれだけは言える。いつの時代も悪人と善人はいる。また、悪の心で善行を装っているもの、だます者。また悪の誘惑に負け、善の魂を売ってしまう者。

一方、悪を目の前にしても教鞭な精神力で、悪をもともしない強く優しい心を持った者。

苦労は報われないのかと置いていてもトータルで見れば、良いこと・悪いことイーブンであるのが人生。長い間生きてきたおばあは、それだけは明かであると断言していた。

立場は弱くても心を強く持ち、悪魔に魂を売り飛ばさない勇者は最後には勝者となり、ディオスの元に行くことができる。

おばあはの使命は、人々の心の灯火となること。希望を捨てず夢を持ち、しかし慢心せず、ディオスの前で正しく謙虚であることを教え諭

す事。人がみていなくとも、デイオスは必ずみているのだということ。

来る者は拒まず話を聞いては助言を与えるおばあ。遠くに助けを求め人あれば、行つて助けるキジムナー。

わしんなよーやーわしんなよーわねうむとーんどー かなさんどー ぬちどう宝

と言つて励ますことを忘れない。

もしおばあが存在が必要なくなれば、きつとこの世からすべての悪は消え去つてしまうのかもしれない。そうすれば、おばあが納められる日が訪れるのかもしれない。

水晶玉が映し出すこれまでの数々の悪行を葬り去つて行くために、おばあは日々祈りその出来事の時代・場所に行つて教え諭そうと試みる。

さて、どれだけの人が聞こえる「耳」と、変わる「勇気」を持っているのだろうか。

おばあとキジムナーの果てしない時空を超えた旅が始まる。

## 成敗された悪代官

データNo. A63250

最初の案件は……

データ管理をしているキジムナーがおばあとの浄化紀行プランを  
チェックしている。

おばあときじむなーなんて、めっちゃアナログなイメージだが  
実は、しっかりデジタル管理されているのである。

保存画像も重くならないように、gifか解像度低いjpegで保  
存してあるし

おばあの水晶画面の編集データって、おそらくMacかも？

キジムナーはフォトショもイラレも使えるようだ。

データに関することは、すべてキジムナーが管理・メンテナンスしてい  
る。

まず最初の改心への呻き（うめき）が聞こえたのは  
ハポンという国のようだ。

ある悪代官が越後屋とつるんで、人気の染物問屋を潰そうとしてい  
た。

染物屋の利益をわがものにしようと、あの手この手で非道の限りを  
尽くしたところ

暴れん坊なやんちゃ將軍にめっかつちやって

成敗されてしまった。

ところが、成敗される直前に、この悪代官は  
改心しようと思ったのであった。

しかし、寸での所で間に合わなかったのである。

ああああ、なんとということだ……

わしの人生に一片の悔いなし

なんて言うてる場合じゃなかと

まだ武家屋敷のローンも残っているというのに……

せめて極楽浄土で家族への施しを請いたいところなのに

おろろーん……と、嘆き悲しみながら絶命した。

すると

ちりりーん

紫の鈴の音が響いた。

「そなた、罪を悔い改めたいのじやと?」

おばあが悪代官に問いかけた。

「そですそです。わしやあ悪行三昧してきたが、

罪を悔い改めてから、命をささげたかったのにい

上様つたら後生だから・・・って言おうとしたら

えええい!成敗いたす!って

いきなり切りつけられちゃったの

ばあさま

どうにかならない?」

悪代官は手をすりすりしながら、おばあに懇願した。

「そうじゃな。そなたの家族を守りたい心はよおくわかった。

しかしのお、そなたとそなたの家族だけがよければ

よいのかのお?」

そなたのおる町民がどなっても

よかと?」

「・・・」

「ほんとうに罪を悔い改めたいなら

すべての財を寄付しましょうねー。お代官ちゃん?」

「・・・」

「あい!あきちやびよ!

この後に及んで、迷うておるのか?」

「・・・いや・・・極楽行ってちゃんと生まれ変わりたく候

私の財をすべて町に寄付します・・・」

悪代官はやつと決心がついたようだった。

「でも、あのお、妻と息子は路頭に迷わないよう

なんとか配慮してもらえないでしょうか?」

とりあえず交渉の余地はあるかな?と、悪代官はおばあに頼んでみた。

「キジムナー、妻と息子のデータをよこしなさい  
ふむふむ。

妻は従順で、息子はなかなかの勤勉のようじゃな。  
それでは、妻と息子が町の人々に溶け込み  
困ったときには皆を助けられるような職に  
つくようなチャンスを授けよう

あとは本人たち次第じゃ」

「ああああありがたき幸せ……」

御祖母様、心より感謝申し上げます

そして、これこれどれどれそれぞれのわたくしの罪  
心より悔い改めます。

これまで痛みを負わせた人々にお詫びいたします。  
もうしわけございませんでした。

私の財は、まずこれらの人々にはじめにお渡してください。

そして幸せに暮らせるよう便宜をはかってあげてください。  
悪代官の表情が穏やかになっていくのが見て取れた。

「よおし、そなたの魂レベルは

かなりクリーンアップされてきたようじゃ

クーラント少し足りないかな？

オーバーヒートおこさんようにな……

足しておくわ

そなたの魂修行のために

生まれ変わるときは、相当な困難を極める境遇に置かれるが  
それでもよいかの？」

「はい、なんでも甘んじてお受けいたします……」

代官は覚悟を決めたようだ。

「よろしい。それでは修行層に入るがよい。

そこで魂を清め、生まれ変わり、現生での修行を行うのじゃ。  
生まれ変わった世ではしっかり修行するのだぞ。

今世でおこなった悪をすべて洗い流すように  
魂をぴっぴかぴかにして、天寿を全うしなされ」

「ばあさま!!!」

ありがとうございます。

それでは、修行層にまいります。」

ぽちゃん

悪代官の魂は修行層に入っただけ。

相当汚れていたらしく、培養液濃度をあげないと

なかなか魂に正しい栄養がゆきとどかないので

調整をキジムナーにまかせ

おばあは、次の案件へと移ることにした。

「はあ。やれやれ、一件落着？」

これって、どんだけやってかないとだめなんですよ」

世の中の悪って如何ほど？

あたしやかなわんよ・・・おろろーん。

ってなわけで、おばあとキジムナーの旅はまだまだ続く・・・

## 浄化の邪魔者

「ねえ、おばあ、最近さ、アクセス速度が遅いんだけど、光通信の速度あげてくれって

上にいつてくんない?」

キーボードらしきツールをたたきながらキジムナーがおばあに声をかけた。

「これ以上上って?足りないの?1Gbpsぐらいじゃなかったっけ?」

キジムナーがくるまでは、おばあがひとりデータ管理をしていた。

「ベストエフォートだから、1GBなんてでないんだよ。回線増やしてもらえないかなー

あとマシンのスペックアップもしたいんだよね。」

「ほお・・・わしらの頃はpen-tiumでも、すごいって、自慢してたのに、最近じゃデュアルコアとかいうんじゃない?」

「おばあ、それももう古いよ。てか、わしらの頃って、いつの頃の話?おばあなにやってたの?」

「ひえ〜時代進みすぎ。3000年近く生きてるからのお、いつと言われても・・・何やってたって、こんだけ生きてるもん、いろいろやってきたわ(遠い目)」

「とにかく、上に言ってね」

「上って、上様(かみさま)とかいて、うえさまと読む、それ?」

「それ以外、どこに言うの?とにかく予算つけてって言っただけね。交渉係はおばあなんだから」

「ほんじゃ、お気に入りのおきんつば持参してはいかがかねえ〜」

「おばあ、付け届けなんて邪じゃね?」

「きじむなー、なにを言う!お茶請けに持っていただけじゃ。しゃべっていると喉がかわくじゃろ?お茶をのんでたら、なんかつまみたくなるじゃろ?上様へのご配慮じゃ」

「ほんとかな・・・おばあ最近ちょっと楽しそうとしてない?その邪

精神あるから世の中から、悪が消えないんじゃないの？浄化作業が不十分なんじゃね？」

「な、なにを言うか!!よ、邪なんてないぞ!!ストレートで見事な縦縞ストライプ模様で、心はまっすぐなんじゃ！」

「つまらないこと言っただけで、さっさと行っただけでね。もう作業時間が多くて、プライベートの時間がとれないんだよ。えん・まこちゃんとはデートしたいのに」

「なに???闇魔王の娘とデートじゃと?」

「まこちゃんだったら、かわいいんだよねー。ジムさんのためにお弁当つくってあげるから

今度ピクニックしよう!

って誘われてさくでもさ、浄化作業過酷すぎて、寝る暇ナッシング、デートする暇なんかもろんナッシングなんだっ!」

「ふん・・・わしもしたことないのに・・・」

「え?おばあ、いまさらデートとかしたいの?」

まさか・・・罪人の中に、ぽっ、ってなった人いたとか?

あ・・・レパン4世?人の心を盗んじやってすいませんでした!つてやつ???

「ち、ちやうわい!わしの目当てはレパンじゃなくて、六右衛門じゃ・・・」

あっ!・・・う・・・」

「はあ・・・斬鉄剣ね・・・確かにかつこいいわ・・・」

って、おばあ!だめじゃん!そんな邪!!!」

「邪なんかじゃなかと!純愛じゃ!!!」

「・・・わかったよ。そんなむきになんないですよ。」

とにかく、アクセススピード上げてもらわないと、浄化作業遅れまくりだからね。

たのんだよ。」

「あい、なんでかね?」

であるよ

だからよー」

「おばあ？ぼけまわしてる暇、ないんだからね？」

「わかりました・・・キジムナー様っ」

「おばあ、急に女子ぶつたら気持ちわるいから

たのむからやめてくれ。」

「ところで、キジムナーって長いから呼びづらいんだけど。おまえの名前はなんて言うの？」

「は？妖怪だから名前なんかないよ。」

「それじゃ、キジムナー・太郎ってどう？」

「えーなーなんか、ずっと全敗の負け確定レスラーみたいじゃん・・・」

「よいではないか。相手に勝利の美酒を捧げて、喜びを与える幸せ運搬人ってことで」

「いいよ・・・なんでも。てか、ちなみに、おばあの名前は？」

「わし？わしは、紫・ばばあじゃ。」

「ばばあってファーストネームなの？」

「んん、よくわからん。ま、どうでもよかろうが。じゃ、太郎行ってくるぞい。いいこいいこ〜」

「オレは犬か・・・」

「次の案件だけきいとして、出発しようかの？」

「次の案件は・・・あ、いじめ、だね」

「ええ、それ現代じゃん。あたしそれ苦手ええ。他のにして？」

「おばあ！だめ!!!優先順位つてのがあるんだから!!!」

「・・・わかりました・・・現代は複雑怪奇に入り組んでいるから、いろいろ資料をお願いいたします。太郎D様」

「はいはい、いってらっしゃい。車に気を付けてね」

「ふえ〜い」

\*\*\*\*\*

全世界津津津々浦々、時代も場所も飛び越えて、おばあとキジムナーの旅は続く。

次は現代へ。

## あーゆーれでい？あめりきやんV01. 1

「さてと、次の案件はB24398。あー、これって鉄砲とか無法地帯のあそこか・・・僕らつて、ちなみに打たれても大丈夫なんだよね？そこんとこ確認してなかった・・・刀だったら、直前に電波キャッチして、逃げる瞬発力は僕もおばあもあるんだけど、マグナムとかね・・・怖いな。」

「なんか対策考えとかないとな。おばあが帰ってきたら、作戦会議してから出発しよつと」

「太郎ちゃん。ただいま。どう？スペックアップ及び回線速度も調整してもらったけど？」

「おばあお疲れ。おかげで、ずいぶんさくさく動くようになったよ。ところで、次の案件だけど、ゾナゾナ州つてとこのいじめについてだよ。いじめられた男子が、ぶちきれちゃって、いじめてたギャイアンみたいなやつを鉄砲でぶち殺しちゃったあげく、あたりにいた人達も被害にあっちゃつたみたいだ・・・」

No longer CHICKEN!!つて叫びながら・・・」

「もはやへたれじゃねーずら、か・・・相当鬱積がたまつとつたんじやろうな・・・かといつて、罪もない人々を惨殺するのはいただけない。しかし、こいつは悔い改め心なしで、この世を去つたの？亡くなる間際に、おれ、悪かった・・・つて思わなかったの？」

「被害者意識満載だからね・・・オレは悪くない、つて思ったんじやない？いじめたやつが悪い。周りが悪い。社会が悪いつて、ぜんぶ他人のせいにしたんじやないの？たしかに被害者つて点は否めないけど」

「そつかー。親が悪いな・・・親のデータもちょうだい？太郎ちゃん」「ふむふむ・・・親は厳しくつけて、こどもの自主性をなにも尊重しなかったんだな・・・おやじは立派な弁護士で、母親もカウンセラーか・・・人のカウンセリングは上手でも、息子のことはほつたらかしだつたんじやな・・・こやつらはまだ生きておるが、後にあたしらの浄化作業が必要になるじやろな。」

リンク作業、よろしく、たろ」

「おばあ、ピストルに打たれても大丈夫なように、対策考えておいてね」

「え？ピストル？打たれてもいいよ。もう何千年も生きてるから、そろそろ死んでもいいな。って思ってたの（はあと）」

「おばあ！おばあがしんじやったら、僕ひとりで浄化作業なんて、とてもじゃないけどできないんだよ！えん・まこちゃんと結婚して、こどもでもできたら、みんなで仲良くお仕事するけどさ」

「なにそれ・・・あたしを脅かしてるの？あたしがさぼって、作業増えたとでも言いたいのか？」

「もうさー、行きたくないからって、ぐずるのやめてくれる？おばあちゃん」

「・・・ほれ、これをもってきな。透明盾。外からみえないけど、どんな弾も跳ね返すから。ライフルでもぜんぜんおっけーよ」

「へえー！すっげーアイテムもってんだね。さすがおばあ！だてに長く生きてないね」

「ふん・・・とにかくゾナゾナ州に飛んで、とつとと案件解決してこないとね」

.....

おばあは密かに、ロリポップを買ってこようと、邪心を持ちながら案件処理紀行に出発しようとしていた。

## あーゆーれでい？あめりきやんV01. 2

パンパン！

バキyunバキyun!!!

ダダダダダ・・・

乾いた銃声音が街中に響き渡る。

「ねえ、太郎、帰ろうよお、あたしやだあ、ここ」

「おばあさ、頼むから、はすつ葉声で甘えるの止めてくれる？いやでも  
案件処理しなくちゃいけないの！透明盾あるから大丈夫なんでしょ  
？」

「ん。わかんない。しばらく使ってないもん」

「え、く!!!大丈夫っていったじゃん!!」

「よくよく考えたら、前回つかったのって100年ぐらい前だったか  
なくって。それって、最近じゃないじゃん？」

「おばあ、今頃気づかないですよ・・・もう。なんとかするしかないよ。  
この後、例の連続殺人犯は警官に射殺されるんだから。そこまで行っ  
てあげないと」

「もうさー、臨終直前に改心しようって思うんじゃないかってさー、もつと  
前に気づこうよー」

「おばあ、それは理想論ね。それができるなら、この世から犯罪や悪は  
なくなるでしょ！もう、今更なに言ってるの」

「そりゃあそうなんだけどさー。この国って、ヤソリック  
じゃなくて、フロヘスタントやん？だから、交渉ちゃんどできるか  
な。あたし苦手なんだよねー。」

「おばあ、苦手とか言っちゃられないよ。救われたいって思ってるんだ  
から、心で話せば通じる。人間として生まれたら、だれしも罪びとな  
んだよ、だから真実に心から悔い改めることで魂も救われるんだよっ  
ておばあがいつてたんじゃないか！」

「そうだけどさー。なんか昔は問題こんなに難しくなかったよー  
な気がすんのよ・・・現代はいろいろ複雑でさー。あたしの手に負  
えないんじゃないかと」

「おばあ？それでも僕たちの使命なんだから、やんなくちやだめなのよ？わかる？おばあがちゃんとしないと、これから先も、永遠に生き続けることになるよ？」

「ええええ？そりゃあ困る。コラーゲンもほとんどないからの。女子にみえんさかい、いつまでも化け物でいるつちゅーのはいやじゃ！」「でしよお？おばあも、かわいい女子として生まれ変わりたいでしよ？だから、今をがんばろうよ、ね？」

嫌がるおばあを、懸命になだめるキジムナー

「……しょうがないな。じゃ、いくとするか……びゅー！」

「え？おばあ？何なのあの人……めっちゃ速いんだけど？待ってー！おばあー！」

流れ弾から素早く身をかわすと、おばあは瀕死状態の男の前にたどりついた。

リンリンリリーン

（あれ？鈴の音が現代西洋モード？まあいいや。脳死しちゃってるけど、心臓はかすかに動いているようだ。）

おばあは、倒れている男の顔を覗き込んだ。

「もしもし、おぬし？あ、英語じゃないとあかんの？大丈夫だよ？魂状態だったら、言語関係なく通じるよね？」

「OH……Lady……Thanks」

「え？英語じゃん。あんた魂で話せないの？」

「あ、話せます……すみません、つい、嬉しくて。」

「よろしい。で、なんでまた改心しようと思ったの？こっちとしては、もっと早くに気づいて、大事になる前に、更生してほしかったわね」「ごめんなさい。もう、荒れ果てて、すべてを恨んでました。で、警官に射殺される直前に後ろの方に、妹の姿が見えたんです。警官に保護されながら、私を説得しようとしたみたいで」

「ふむ。なるほどね。妹の姿をみた瞬間に己の愚かさを悟ったのだな？」

「そうです…誰も私のことなどわかつてはくれない。私の味方など、だれもいないと…自暴自棄になっていました。しかし、目に涙をいっばい溜めていた妹を見た瞬間に、自分のしたことを後悔したんです」

「なるほどねー。太郎、妹のデータちようだい。…あー、妹と離れて暮らしてたのねー。だから、妹がどれだけ案じてたかってのも気づかなかったのね。妹さん、看護師さんめざしてたんだ？だから、都会の学校に行ってたのね」

「そうです。せめて妹はりっぱな看護師になってたくさんの人を救ってほしい…」

「そんで、なにを犠牲にする？魂の浄化には必要なんだけど？でないと天国いけないし生まれ変われないよ」

「…実は、僕が作った未発表のプログラムがあります。それがあれば、きつと医療に役立つかもしれません。ガン発見分析及び新薬作成プログラムです。できるだけ早い段階でガンを発見して、適切な新薬を速攻で作成し、治療法プランを出して、確実に投薬できるようなプログラムです。特許を取りそれを売って、お金にしようとしていました。無料提供致します。」

「太郎、それ使えるか、分析して」

「おばあ、データ、これです」

「ふむ…使えそうじゃな。それでは、そなたの魂を浄化層、わかる？プールみたいなのこね。層になって、自動で振り分けられる。そこに入れたげるから、あとはどの国に生まれ変わるかわからないけど、しっかり修行するんだよ。Right?」

「Got it, thanks a million.」

ぼっちゃーん

体の大きさに比例して、魂もずいぶん重量があつたようだ。銃殺された男の魂は、浄化層に入って行った。

\*\*\*

「なーんかき、やるせないよね。鉄砲でバンバン！って、あつさり死ん

じやうんだもんね。命乞いするヒマもないわい。」

森の事務所に戻ってお茶をのみながら、おばあがぼやいた。

「あーおばあ。お礼の手紙がきてるよ。目安箱に入ってたらしくて。例の悪代官さんの奥さんから。武家屋敷は売って、息子さんと借家にいるんだって。」

それで、寡婦手当と遺族年金で細々暮らしてますって。息子さんもお医者さんになって、貧しい人からは、お金を取らないって、評判のドクターになったみたいだよ。なんでも、旦那さんの代官が奥さんの夢にでてきて、おばあが助けてくれたから、そういう援助を受けられたんだよーって、教えてあげたみたい」

「そっか．．それは良かった。悪代官は生まれ変わって、しっかり修行をしているようだからね。遺族にも恩恵があったんだろうね」

「まあ、こういうお礼の手紙が届くと、やる気が起きるね。」

「そうじゃな．．次の案件は？」

「なんか、おばあ元気ないけど、大丈夫？次の案件は．．．あ！サグラダのミリアさんだよー」

「え???彼女、娼婦だったけど聖女認定されたんじゃないか?とつくに浄化してるやん!なんでわざわざあたしが浄化しなきゃいけないの???」

「うーん．．わかんない。ちよつと調べてみるね。わかったら教えるから、おばあ休んでて」

「りよーかーい」

こっそもちかえったロリポップをぺろぺろなめながら、おばあはしばしの休憩をとるのであった。

## サグラダ・ミリア

ゆらゆらと木漏れ日がふりそそぐ昼下がり。キジムナーが案件チエックをしている。

「おばあ、次の案件……ってかき、

テーマアイテムの「水晶」って出てこないんだけど大丈夫？

長年生きてるから忘れちゃってましたー、とかつてしやれになんないからね。

ちやんと、僕が毎日、しっかり磨いてるから画像と動画データは問題なく水晶画面に写ってるし。

プリンターはこの間変えたばかりだからOK。

腰からぶら下げられるポータブルタイプだよん。

あれ、なんか、おばあうつろだけど、どうしたの？話きてた？

キジムナーはこっそりおばあ頭の頭にパッチを当てる。

\*\*\*\*\*おばあ回想中\*\*\*\*\*

時、AD300年ぐらい？

ニーハオママー！エンマ様！

三つ編み姿の少女が、細マッチョな男に駆け寄る。

ちようどその時、四蔵一行が到達して、遠くから

きんかーくって声が聞こえる。すると

ほほーいって、いいながら、きんかく、と呼ばれる人は

壺の中に入って行ってしまった。

すると、弟だか兄だかわからんが、きんかくって人が助けにいつちやう様子。

少女おばあは、壺の中身をのぞきこんで

しくしく泣いている。

\*\*\*\*\*

\*\*\*

思考読みとりパッチから転送された画像が

水晶に映し出されている。

「えー……！！なに??これっておばあの初恋??」

「う、うるさい!!!勝手に人の思考を読みとるでない!!!」

「てかき、エンマ様って、今の閻魔大王?」

「そいや、閻魔大王も年齢不詳なんだよね?」

「なんでも金閣・銀閣って兄弟がいて、助けた方が封印解けちゃってそつからずつと生きてるんだよね。片一方は壺の中に入っちゃつて・・・」

「たしか閻魔大王が、銀閣じゃなかったかな?」

「金閣はいまだに壺から出てきてないのかな・・・」

「銀閣大王つてき、山を動かすのが得意だったんだよね?」

「じゃあ、僕らとコラボすれば、強大な力発揮できるんじゃない?」

「えん・まこちゃんとの結婚は実現させねばな!!!」

「ふん・・・勝手なことばかりいいよってからに」

「おばあ!なんでき、銀閣大王とくつつかなかったのよ?」

「おばあ、娘時代は可愛かったじゃん?ん?」

「う、うるさい・・・ほつといってくれ」

「ほつとけないよー」。仕事に影響するからね。その心理状態、片づけてもらわないと、僕も困るんだよね。

「・・・え? (映像解析中) 金閣に言い寄られてた?」

「でも、銀閣好きだつて言えなくて、おばあが身をひこうとしてた?で、もしもじしてたら金閣はつぼに吸い込まれちゃったんだ。」

「銀閣大王も助けにいくけど、金閣は助けられず、自分だけ脱出成功するの・・・」

「そんな銀閣大王に言い寄ることなんて、できましえん!」つて

「おばあは、自分の心を押し込めてきたのね。。。2000年近くも。」

「やだ。おばあつて、けなげで、可愛らしいんじゃない!」

「ぶぶぶ。」

「今からでも銀閣の閻魔大王とくつつけばいいのにい〜」

「おまえ、さつきからうるさい!!おばあのごことは放っておいてくれ!」

「はいはい、わかりました。とりあえず放置しますけど」

「次の案件はしつかり片づけてくださいよ?けなげなばあ様?」

「ふん・・・なんだつけ?サグラダのミリアちゃんの話?」

「そうそう。えっとね、サグラダのミリアさんは悪魔の恨みを買ってしまつて

うまづめの体になつちやつたんだつて。それを婚約者のエススさんに言えなくて

言わずに結婚してしまつたんだつて。

そのことを悔い改めたいらしいよ」

「ふおーーーーー、えらい殊勝な魂やな。わしがわざわざ浄化せんでも……

まあ、悔い改めたいつて言つてるんだから、行つてあげないとな……うん。そのことで、最近のヤソリックが衰退してるんじゃないかと心配しているらしいよ。特に先進国とかではさ、宗教っていうと「だまし」みたいな新興宗教が増えちやつて、人々は「宗教」つて言葉にうさんくささを感じているらしくて。

そうじゃなくて、心の指標つてか道徳の基本つてか、人はこうあるべきつていう教えがないと、人間墮落しまくつてしまつてのを、イリストでも又ハマンドでも、そこを言いたかつたのに……

それを、広めたい使徒達ががんばつたのに……つて、嘆いてるんだつて。」

「ま、あれじゃな。sinとguiltの違いじゃよ。guiltは人が裁く法だけどsinは神が裁く法ね。人として大事なのは後者。ミリアちゃんは、そこを言いたかつたんだね。よおし、ミリアちゃんの希望を叶えてあげなくちゃね！」

おばあは、急に力がわいてきたようである。にしても、なんでまた急に恋煩いモードになつちやつたんでしようね？恋する季節？とりあえず、それはおいておいて、お仕事がんばれくおばあ！

## ラルドの聖布

おばあとキジムナーは、ラティマの丘に来ていた。

「あく。和むわく。ドツキユンだのダッダーンだの、あーゆーの、ほん  
と苦手。」

なんで人間はあんなもの発明しちゃったんだろ。狩猟にだけつ  
かってりやいいのに

人殺しに使ったらあかんやん!!!」

おばあはいつになく熱い女と化していた。

ラルドの岩にたどりつくと、キジムナーとおばあの2人はミリアを  
探した。

「おばあ、あれ、ミリアさんじゃない?」

体中に亜麻布をまとった女性らしき人が岩陰に横たわっていた。

おばあは黙ってゆっくりと、その女性に近づいて行った。

「そなたが、ミリアさんだね?」

おばあは静かに、亜麻布の女性に声をかけた。

「はい、左様でございます。」

遠路はるばるお越しいただきありがとうございます。

ご存知のように娼婦を生業(なりわい)としていた罪はすでに告白  
をしておりますが

うまづめであったことを隠しエススの妻となったことは隠してお  
りました。

しかし、エスス様の教えを広めるためには、一点の汚点も残しては  
ならぬと思いつたのでございます。

後の世の現代では、ヤソリックも衰退し、若い人が集まらなくなっ  
てしまったと

聞いております。

このままではヤソリックの存続の危機と思ひ、願ひを出しました。」  
かすれた声で懸命に心の内をつたえようとするミリア。

「殊勝やお．．．。しかし、ミリアさんの言うとおりなんじゃ。現代  
では

テクノロジーが発達すればするほど、人の心が崩壊する傾向にあるんじゃない。

小さい子供から目と手を離すな、は、鉄則なのに、携帯に夢中になってる親や

ええとしこいた年寄りが、孫をつれて銀行などに来ていても、放置。ああ、なげかわしい・・・教育の基本つちゅーもんが、崩れさつてのお。

まあ、現代だからこうなったということもあるとは思う。ただ、こういう放置親は

自分も放置され、またその親も・・・なんじやろうが、アナログ時代は

隣近所がそれをフオローしとつたんじや。

今はそれがなくなつてしもうたから、自ら積極的に社会性を持つとうとしなければ

子供はKYのまま大きくなってしまふのじや。」

おばあは遠くを見ながら、世知辛い世を嘆いた。

「おばあつて、たまーに、すんごくびしつと良いこと言うんだよね〜そういうとこ尊敬しちゃうんだけど」

キジムナーも感嘆する位、おぼあの講釈は愕くほどの的を得ていた。

「それではそなたが捧げるものを聞くとしよう」

おばあがミリアに尋ねる。

「エスが臨終の際、血をぬぐった布があります。ラルドの岩水をふりかけ

この布で押さえると、不治の病は治ります。また、盲目の人は目が開き、話せなかった人も声を出せるようになります」

「よろしい。ただし、罪を悔い改め、御心に従ったものにしな

その効力は発揮しない。それでよかろう?」

「はい、エスの12使徒もそれを切に望んでおりました。

どうか、彼らと私の願いが叶いますように」

そう、言うど、ミリアは静かに目を閉じた。

「よくわかった。そなたの十分すぎる尊い魂を、浄化層に捧げさせて

もらう。

そなたの魂よ、永遠に平安あれ、アメン」

キラーン

ミリアの魂は、浄化層の水に反射してキラキラと光り輝いていた。

\*\*\*\*\*

「おばあ。今回はさ、悔い改めさせるっていうより、僕らが考えさせられちゃったね」

「そうじゃな・・・」

と、言ったきり、おばあはだまりこんでしまった。

「おばあは、外の空気を吸おうと、森に散歩にでかけた。

森林浴を終えて事務所に戻ると、えん・まこからのお届け物があった。

「おばさま、このあいだは、大根の煮物ありがとうございました！」

とてもおいしかったです。お礼にココナツクツキーを焼きました。

ジムさんと召し上がってください！」

可愛らしい文字のカードがクツキーに添えられていた。

えん・まこは、現在は銀閣である閻魔大王の娘であるが

実は、おばあのお妹である橙（だいたい）姫と金閣王の娘であった。ある日、金閣が壺に飲み込まれてしまい、橙姫は夫を助けようと壺の中に入っていこうとするが、その直前、ぎよ・はつかいに見つかり

食べられてしまう。

銀閣は金閣を助けようと壺に一旦は入るが、壺センサーのエラーで銀閣だけはじかれてしまった。

金閣はいまだに壺の中。母親をなくした金閣の娘は

親が居なくなってしまうため、銀閣がひきとって育てた。

その娘が、えん・まこである。つまり、おばあのお姪っ子にあたるわけだ。

そんな事情をしらないキジムナーは無邪気にえん・まこへの恋心を募らせるが、おばあとしては複雑だった。

キジムナーが浄化行脚車を清掃し終えて戻ってきた。

「あれ？おいしそうなクッキーだね。どうしたの？」

「え？もらったんだよ・・・」

「だれから？」

「と、ともだち」

焦るおばあ。

「おばあ友達で、こんなこじやれたクッキーつくる人いたっけ？

泥かけばーさんは、てびちとかこってりしたものしかつくらないし

塗り板は、刺身専門だもんな・・・」

「つべこべぬかしとらんと、食うたらよかと！」

「なんか、感じ悪いなあ・・・はいはい、喜んでいただきます・・・

ムシャムシャ・・・う、うまつ!!食感はサクつとしてるけど

まつたりとろけるような、ココナッツエキスが、お口の中に広がる

わ・・・」

「おまえはテレビショッピングか」

「あ！来月はさ、休暇取つていい？えん・まこちゃんと、お花見したいんだよね」

「・・・」

「おばあ？」

「届け出しといて。考えとく」

「なんか変なんだよな・・・おばあ。最近。休暇中はおばあも休んでいいんだからね？充電しないとお互いによい仕事できないしさ」

「わかったよ・・・温泉にでもつかってくるわ」

キジムナーとおばあは、しばしの休暇を楽しむ

あくまで「予定」である。

ばいばい

キジムナーが休暇を申請したので、おばあも休暇を検討中だ。日頃の疲れを癒そうと、ゆったりゆったり日帰り温泉プランを計画していた。

キジムナーも毎日忙しく働かせてしまったから交代で休暇を取ろう。おばあはとりあえず1日だけ休んで、キジムナーには2日ぐらい

休んでもらおうかと考えていた。

「おい、太郎。おまえ、先に休む？それとも後？」

「え？どっちでもいいよ。おばあが最初に休んでよ。休み中データだけまとめておくから」

「そうか。それじゃあ、そうするよ。帰ってきたら、好きなときに2日ぐらい休んだらいいよ」

「お！ありがとう！おばあ！そうするね！」

「じゃ、わしは、あさって、温泉につかってくるから、ひとつよろしく」

「おばあ、のんびりしてきてく。おみやげとかいらさないから！」

(それは、買ってこいってという催促タロ・・・)

おばあは、近場の温泉で休日を過ごすところにした。

湯治場のある人影のないのんびりとした温泉郷についた。

硫黄の臭いが一面にたちこめる。体の隅々まで効きそうだ。

湯船に浸かっていると、湯気の向こうから一匹の猿が現れた。

「ん？おぬしは、そんなろつくーじゃな。おなご風呂に入ったらあかんじゃないかい」

「おう！紫の水晶おばあ！ひさしぶりだな！おばあもいちおう女だったな！ハハハ！」

「ははは、じゃねーよ。話あるなら、お湯出てからにしてちょうだい」  
「わかったよ。中庭で待ってるから、そっちに来てくれ」

おばあは、ゆっくりり目をつぶって、再び温泉に浸かった。

「で、話とは、なんじゃ？ろくう」

温泉浴衣に着替えたおばあが、そんなろつくーの方に歩み寄った。

「おいら、悔い改めようかと思つてよ」

「悔い改めじやと？ありすぎて魂浄化見返りプランが立てられるかいの？」

短気ですぐにケンカするわ、盗み食いは常習犯だわ、罵詈雑言なんかあたりまえ

目上だろうが暴言吐きまくり。そんな非社会的すぎる行動ばつかで、

悔い改めるつて、相当反省しないとおいつかんよ？」

「まー、本気で悔い改めようなんておもつてないぜ」

「じゃ、なんでわしを呼んだんじや！」

「ほら、ばあさん、そろそろおだぶつになりてーつて

いつてただらろ？だから、呼んでやったんだよ。ばあさん孝行してやろうと思つてよ」

「おまえができるいいことなんか、なにひとつないじやろ？」

「銀斗雲にのせて、南米一周の旅とか、連れてつてやるよ」

「そんなものいらん！」

「じゃ、休暇中のようにだからさ。肩もんであげるよ」

「いらんいらん！そもそもおまえのダチが、わしの妹を食うたんじや！」

「あ？あいつ？友達なんかじやねーよ。ぎよはつかいだろ？」

オレ、あいつ、いちばんキライなんだよねー。

カツパはさー、たまにむかつくけどクールだからさ。オレ様の邪魔しねえんだけど

ぎよはつかいのやろー、おれがとつといた金の肉マン食いやがつて

四蔵さんの機嫌ばつかとりやがつてよ。」

「よいではないか。仲間と分け合えば。四蔵さんを皆で助ければよいではないか」

「やーだね。オレのものはオレのもの。あいつのものもオレのもの」

「・・・おまえは一生お釈迦様の輪っかを頭につけて、苦しんどけ!!

わしを呼ぶなんて300年早いわ!!わしや帰るっ」

「どー帰るの？こーい、おばあのとこでしょっ？」

「あれ？なんか太郎の口調だけど？」

「もー、きつたないなあ〜おばあ。よだれタラして寝てたよ！」

「なんだ・・・夢か。わし、なんか変なことゆうとらんか？」

「へんなことって？」

「え・・・あのおそのお・・・」

「何も言っていないよ」

「そうか・・・」 ホツと胸をなでおろすおばあ。

「ねえ、おばあ。休暇取る前に緊急案件入っちゃった

臓器売買と麻薬のブローカーだって」

「ええええええ、またなんか殺伐としすぎてるやーん・・・」

あたしの苦手部門じゃない・・・そんなアクドイことやって

悔い改めようなんて気持ちに、ほんとうになつたのかね？」

「んー。とりあえず、行ってみないとね・・・」

せつかくの休暇を楽しみにしていたキジムナーとおばあであった

が

緊急の案件が入ってしまったようだ。

休暇は先延ばし。今度も二人は忙しく魂浄化の旅へと出発するの

であった。

## 兵どもが夢の後

「臓器売買のブローカーなんてさ……やなんだけど。そもそも。おぞましい……」

「でもさ、臓器とか好物の妖怪だっているわけだし……」

「だからいやなんじゃ!!そんな下等な妖怪と一緒にされてたまるか!」

「まあ、ね……とにかく、さっさと片づけて休みにしようよ」

「太郎!あぶない!」

「あゝー……!」

なんと、キジムナーは巧妙に仕組まれた落とし穴に落ちてしまった。

「お……ば……あ……!」

「太郎おー……、大丈夫かあー……?」

「なんとか……ひっかかっている……下まで落ちてない……」

「太郎、ちよつとふんばれ。いいか、わしが今から念力を送るからそれを受け取って集中して力をこめるんじゃ。わしが思いっきり念でひっばる。」

いいか?」

「わかった……」

「いち、に……さん!!!だー……!!!」

ぐあー……と、大きな竜巻が起こった。

その瞬間、キジムナーは落とし穴から飛び出し、どたつ、と地面に落ちた。

「太郎、大丈夫か?」

「ん……なんとか……」

「怪我しておるな……とりあえずこれを巻いて応急処置しておくから。」

あとは、案件をすぐに済まして戻ろう」

おばあは、素早く応急処置をすると、キジムナーをおぶって風のように秒速で案件地へと移動した。

ジメつとしたブローカーのアジトでは、ブローカーの頭と手下が新しい臓器売買を企てていた。

(いいか、太郎、ここを動かすなよ。わしは、あの中に入って、案件者と会ってくるから。じつとしていなさい)

キジムナーは目で合図をしてうなづく、おばあはするすると蛇のようにアジトの中に入っていった。

おばあはアジトの奥の部屋に到達すると、煙になってその部屋に侵入した。

「おい、そなたが案件主じやの?」

「Yes, ma'am... 私です。もうあと数分で命が途絶えますので、手短にお話しします。私は孤児として育ち、この頭にひきとられました。小さいころから盗みを働き、物心ついたときはプロのスリとして働いておりました。この頭がしていたことは知っています。臓器売買の他に麻薬も南の方から入手し売り飛ばし、銃の密輸もしています。

ところが、あるとき瀕死の重傷を負った娘の心臓を引き取りにいくうとしていたのですが、なんとその娘は子供の時に生き別れた妹だったのです。養父母の顔を見てすぐにわかりました。また、後にそのデータを調べましたところ、間違いなく私の妹と判明しました。

その時に私は自分の犯してきた罪を心から悔やんだのです。なんということをしてきたんだ...まさかこの手で実の妹の心臓を売ってしまうなんて...

組織を抜きたいと申し出たら半殺しの目に遭いました...おそらく私の内臓も売り飛ばすつもりでしょう...

「事情はよくわかった。そなたは何を献納するのじや?」

「この麻薬組織のルート図と機密データがこの地下に格納されています。これを葬り去れば麻薬組織は潰れ不法な臓器売買も立ち消えになります。ぜひこれを捨て去っていただきたいのです」

「わかった。もう、なにも申すな。そなたの意向は必ず引き継ぐ。わしが責任を持って廃棄するから安心なされ」

「ありがとうございます...」

ブローカーの手下は静かに目を閉じた。

おばあはすぐに機密データを取り出し速攻で脱出して、キジムナーを抱えると行脚車に戻り、自ら運転をして事務所に戻った。

「太郎、ケガがひどいのお。休暇とは別に治るまでしばらく休んでいなさい。この魂浄化もすこし時間がかかるから、心配しないでゆっくりするといいい。あわびのおかゆを作っておいたから、あとで食べなさい」

「うん・・・おばあ、ありがとう・・・」

そう言うとキジムナーは目を閉じて眠りに落ちた。

\*\*\*\*\*

静かな森の奥深くキジムナーが歩いていると、向こうから小柄な女性性が近づいてきた。

「あれ？キジムナーさん？」

「あ！この間の男の子と一緒にいたお姉さんだね？」

「そうです。道に迷ったところを助けていただいたものです。」

「どうしたんですか？」

「キジムナーさんがケガをされたと、伺いましたので、サムゲタンを届けにきました。」

「それはどうもありがとうございます！お姉さんの双子の男の子は元気ですか？」

「・・・？ケントの事ですか？」

「そうです。柴犬を連れた男の子。あの子はおねえさんとずっと昔双子だったんですよ」

「そうだったんですか・・・。どうりで懐かしい感じがするはずですね・・・。教えていただいてありがとうございます。キジムナーさんには、ケントもお世話になったそうで、これをケントから預かっています。」

「あ、四葉のクローバーですね？」

「そうです。キジムナーさんの怪我が早く良くなりますようにって、ケントから」

「どうもありがとう！お姉さんもこれからは幸せになりますよ！今ま

での苦勞が報われますから。みんなと幸せに暮らしてくださいね！」  
「ごちそうさあがりありがとうございます。必ず幸せになります」

むにやむにや……

「おい、太郎！大丈夫か？」

「あ、おばあ。ボク夢みてたよー。お見舞いに来てくれた人がいて。あれ？体の痛みがないや。すっかり元気になったみたいだ。おばあのおかゆも後でいただくよ」

「それはよかった。あまり無理しないで休んでから、休暇にしなさい。わしも今回めつたに使わない力を用いたから、ちいと疲れたわ」  
(夢って、どんな夢みてたんだろ？)

おばあは、キジムナーの夢が気になっていた。

「うん。ボクの怪我の事はまこちゃんには内緒だよ。心配かけたくないからね！完全復活したら、ピクニックに行くから！」

「そ……うじゃな。楽しんでおいで」

おばあはそろそろキジムナーに秘密を打ち明ける時期なのかもしれないと考えていた。

## お忘れなく

尾長鶏が庭で葉っぱをついばんでいる。おばあは窓から鳥たちが戯れるのを見ていた。

「おばあ、確定申告の書類つくらせちゃって悪かったね。本当はボクがやらなくちゃいけないのに・・・ボクの分は専従者給与で非課税だから面倒くないけど、おばあは申告書類つくらなくちゃいけないから大変だったのに・・・しかも青色だし。」

「なあに、最近はe-taxで電子化になってるから楽になったもんよ。うちはソフト入ってるしね。印刷するだけだもん。昔はさ、わざわざ妖怪税務申告所まで出向いて行ったから、大変だったわ〜」

「それにしても、おばああの休暇返上させちゃったから、申し訳ないよ。ボクがケガしちゃったからさ」

「大丈夫大丈夫。おまえも働きすぎだから、ちよつとは休みなさいってことだよ」

「ははは。それじゃあ、そういうことにして、のんびりさせてもらいますよ。ところで、今日、まこちゃんが妖術大学の受験日だつって、血相変えてたけど大丈夫だったのかな・・・」

「あの難関の学校かい？ 閻魔の娘はあそこを受けたのか・・・」

「そうなんだよ。どうしてもお父さんを手伝いたい！ つていつて、猛勉強してみたんだ。だから、それが終わったら、気晴らしにピクニック行こうよって誘われてたんだ」

「そうだったのか・・・それなら、是非行っておいで。結果はどうであれ、がんばったんだから、ねぎらってあげないとね。なにか差し入れ作ってあげるから、持っていくといいよ」

「あ！おばあ豚ロースのゴボウ巻きと、ふわつと卵焼きが大好評だから、それは是非お願い！前に蝦夷鹿のリンゼにあげたら、めっちゃ喜んでたよ！」

「山ウドがあつたらもってきておくれ。あつたら、でいいからね。天ぷらにするとおいしいから」

「うん！ みつけたら持つてくるよ。結果は一週間後だから、それまで

まこちゃんも落ち着かないと思うから、しばらくそっとしておいて、終わったらぱーつと遊んでくるよ」

「気を付けて行っておいで」

(そうか・・・あの子もがんばりやなんだな・・・あんな倍率の高い学校を受けようとするなんて・・・結果がわかるまで、わしの方がドキドキじゃ・・・)

また新たな心配事がおばあを悩ませる。えん・まこが妖術学校に入ったとして活躍すれば危険が伴う。それこそおばあは生きた心地がしないだろう。

しかしえん・まこの成長も同時に嬉しかった。父を思つてのことだと聞いて、心が熱くなったおばあであった。

次の案件に入る前に、おばあときじむなーは今度こそゆつくり休みをとる予定なのである。

次の案件データもあがっていたが、みてしまうと気になってしまったので、しばらく放置しようとしていたおばあときジムナーであった。

## おばあちゃんのバイト

木漏れ日の光が心地よく、滝から流れ落ちる水の音だけが岩間に響いている。

すがすがしい空気の中で、おばあは静かな自然を満喫しながら、森林浴を楽しんでいた。

(ここは秘密の場所じゃから、キジムナーにも内緒なんじゃ。

隠れてバイトしてるってわかったら、こっぴどく怒られるからねえ。)

おばあはキジムナーに内緒で手紙相談のバイトを受けていた。

本来ならボランティアで行いたいところではあるのだが、それをやってしまうと際限なく

送られてきてしまい、処理に困ってしまうため、少々のお金をいただくことにしていた。

(どれどれ・・・2018年の相談だね。好きな人がいて、とりあえず間接的に

気持ちは伝えたつもりだが、相手の気持ちはわからない。このままあきらめるべきかどうか。

ふうむ、なるほど・・・いつそ相手に聞いてしまえば、気持ちも楽になるだろうに

状況や相手の事を考えるとなかなかそうもいかないわけだ。

簡単にくつついては離れるこの現代にしちやあ、めずらしい相談だ。

本人も相手も奥手で真面目なんだろうねえ。だって、もしこの女子の気持ちをわかって

もてあそばさうと思ったら、近づいていつて気持ちを利用する男もいるからね。

まあ、この女性は自分の考えをしっかりと持っているようだし、そういう男には惹かれないんだろうね。だからこそ相手に聞けなくて悶々としているわけか・・・)

おばあは、自分の経験と重ね合わせたのか、この相談案件に妙に興

味を

そそられたようだ。

（ん？相手の様子を心配しているようだね。顔色が良くなかったけど、仕事で大変じゃないか？ストレス抱えすぎていないか、無理していないか・・・）

そうか・・・本当に心配しているようじゃな。確かに、大丈夫ですか？

なんて、声をかけられればいいけど、本当に気になっていると声もかけられないわな・・・近くにいて一緒に仕事でもしていればなんらかの援助はしてあげられるだろうにお。

どうやって相手に今の自分の気持ちを伝えたらよいかってのが、気になるところじゃろうけど無理に押しついたりするのもしやなか・・・

そんな気持ちを相手もわかってくれていると、思うがなあ。とりあえず見守ってあげるしかないな。

ただ、相手がなにかヘルプサインを出したり、はき出したそうにしていたら

遠慮なく出してくださいオーラは出しておいた方がよいな。

がんばれ。いつか必ずその気持ちが伝わって自由にやりとりができるように。

また、ツーショットになれば、直接はつきり伝えたいようじゃから

チャンスがめぐってくるように。

おばあがおまじないを送っておくから。）

おばあのおまじないはよく効く。それをもらうと、なんだかすつきりして

結果がどうであれ、心が落ちつくらしい。

おばあは、おまじないを込めた葉っぱを、相談者の女性に異空間電送した。

一仕事終えて、ゆっくりしていたら、急に橙とえん・まこのことを思い出した。

えん・まこは小さいときから愛らしくて元気な子だった。

きじむなーとできれば仲良くしてほしいところだが、橙が消えた経緯を知ってしまったら、あの子のことだから、リベンジに行くとか言いかねない・・・それがおばあんの心配事だった。

できれば、えん・まこがいる前で、事情を話し、今はえん・まこもすべてを克服し幸せでいるということをしつかり伝えなければ、と思ったおばあだった。

「ん？なんだか、わさわさするよ。次の案件もなかなか難題な感じが伝わって

きたんじやが・・・」

そろそろキジムナーが案件整理を終える頃だと、おばあは西の山間に沈みはじめた夕日を見ながら深呼吸をした。

## キジムナーの休暇

「おばあ、お帰り！ゆつくりできた？」

「おかげさまで、ゆつくりできたよ。太郎、おまえは2日ぐらいやすんでいいからね」

「ありがとー！じゃあ、エン・マコちゃんとピクニック行くことにするね。」

最大難関の学校はだめだったらしいけど、別の女子学校に行くことに決めたらしいよ。

サポートアドバンスに特化していて、なかなかいいんだって。いろいろ資格とったり

がんばるって。でも、夢はあきらめないんだって。

だから、いろいろ話きいてこようと思ってるさ」

「そうか・・・ゆつくりしておいで。ゆらりぴよんからもらった

ココナツクッキーとマロンドーナツがあるから、2人で食べなさい」

「おお！ありがとう！山菜みつけたら持ってくるから！」

「ああ、あったらでいいよ。エン・マコを励ましておやり」

「うん。彼女前向きだから、僕の方が励まされそうだけど・・・。

じゃ、行ってくるね。おばあ、戸締まり気を付けてね。

あと、次の案件も整理しておいたから、時間あるときに見ておいてね」

「はいはい。みておきますよ。」

おばあは、エン・マコが大学校に落ちたときいて、内心ホツとしていた。

あそこは本格的だから、エン・マコが妖術使いになっちゃおうと、危険が伴う。

それよりも、内勤やカウンセラーなど、外には出ずに父の仕事を手伝ってほしいと思っていた。料理も好きなようだし、将来はキジムナーと

一緒になってもいいし。

そのためにも、なるべく危険な道には進んでほしくなかった。  
いろいろ結果がでて、ほっとするおばあ。

「これで、わしもそろそろ引退できそうじゃな。閻魔大王とエン・マコと

キジムナーで世の悪事整理をしてもらうってことで。」

(紫殿、なかなかそうはいきませんよ。まだまだあなたには  
やっていただきたいことがございます)

「ん!?誰じゃー!わしの思考に話しかけるのは!なんか・・・橙に声が  
似ていたような・・・休みが足りなかったのかいの?いかんいか  
ん

緑茶でデトックスしとかんと」

おばあは、お茶と和菓子をつまみながら、次の案件に目を通した。

「次の案件は・・・なに?幼児放棄じゃと!!聞き捨てならんな・・・

子育て中にも子どもはほったらかし。あちこちの男に貢いで

捨てられ、最終的に後天性免疫不全症候群になってしまったのじゃ

な・・・

子は成人しているようじゃが、これまたどうしようもない人格で

人から疎まれていられるらしいの・・・こんな人間にしてしまった

この親は罪深い・・・

それでも最後は悔い改めようと思つて折るのか・・・

とんでもない人格の子どもを世に送り出してしまったことを悔い

ているのか・・・

とりあえず危険な区域ではないから、太郎を伴つても

特に問題はないようじゃな。

それにしても、心が寒々としてしまう案件じゃな・・・」

おばあは深いため息をついた。

## 愛は永遠

うららかな暖かい日差しを受けて、草々がそよそよ揺れている。キジムナーが持ってきた敷物の上に、おばあからの差し入れやエン・マコの手料理が所狭しと並べられている。

「うわあ。おいしそうだなあ。これ、全部マコちゃんが作ったの？」

「うん。昨日から仕込んでおいて、今朝早く起きて作ったの。」

「すごい！ありがとう・・・嬉しいよ」

「ジムさん、ケガ大丈夫？なんかひどかったって聞いたけど・・・」

「僕もね、ビックリしたんだ。こんな事になるなんて・・・でも

お見舞いにくしてくれた人がいて、そのお粥を食べたら、元気になったんだ。

おばあも心配して、ヨモギ漢方を煎じてくれたり、いろいろやってくれたから

すぐに治ったんだ」

「そうなんだ・・・私も小さい時、よく伯母様にヨモギ漢方を作ってもらったわ。熱が上がったときとか・・・」

「え？伯母様って？」

「紫水晶様よ。」

「え??む、紫・・・って、うちのおばあのこと？」

「そうよ」

「伯母ってどういうこと？」

「紫様は、私の母である橙の姉様なの」

「えゝゝゝえゝゝゝえゝゝゝ！まじかい!!そうなの？」

「はい。私の母は私がまだ物心ついていないときに、

妖怪の壺に吸い込まれてしまったの」

「!!それって、もしかして金閣さんが吸い込まれちゃったやつ？」

「そうなの。父が吸い込まれたのを知って、母が助けに行こうとしたんだけど

一緒に吸い込まれちゃって。叔父の銀閣様も助けに行行って吸い込

まれたけど

壺のエラーで叔父様だけはじかれちゃったの。

叔父様は小さかった私をひきとって育ててくれたのよ」

「そうだったんだ……。もしかして……」

「どうしたの？」

「いや……。なんでもないよ。まこちゃん、さびしい思いをしてきたんだね。」

「ううん。そんなことないよ。叔父様はいつぱいかわいがってくれたし

紫伯母様もいろいろ面倒みてくれたの」

「そうか……。いい娘に育ってくれて、おばあも嬉しかっただろうな……。それで、なんか意味深にあれこれ持ってけとか言ったんだ。

ふだん結構冷たいからな。あの人……」

「冷たいの？」

「あ、いや、ビジネスライクってことだよ。やさしいよ。僕には思いやりあるし

いつもまこちゃんのこと心配してた！そういえば。今思うと納得だよ」

「なにかおみやげ持って帰ろうね。伯母様の喜ぶもの」

「そうだね。山菜がいいみたいだから、お昼たべたら散歩しながら探してみようか？」

草原のさわやかな香りに包まれながら、2人は仲良く遠足を楽しんだ。

\*\*\*\*\*

「おばあ。だいたいま。」

「おう、お帰り。早かったね」

「これ、おばあにお土産。山菜たつぷり。まこちゃんから」

「おー……。今日は天ぷらにしよう。」

「ところでおばあ、なんで黙ってたの？金閣さんと橙さんのこと」「ぎよぎよ魚っ！もうばれてもうた？」

「みずくさいなー。なんで隠してるんだよ・・・」  
「いや、あのーそのー。事実を言ったら、おまえが烈火のごとく  
頭から湯気をだして、噴火して、リベンジいく！とか言いかねない  
と

「思ったからさ・・・」

「まあね。おばあからきいたら、そうだったかもしれないけど。

まこちゃん、愛情たっぷり育て、今、幸せそうだから、

まいっか、って思っちゃったよ・・・おばあにも感謝してるって

「そ、そうかい・・・それはよかった」

いつかは事実を知ることにはなろうと予測はしていたが、

思ったほど、キジムナーにとって大きな衝撃ではなかったことを

安堵するおばあだった。

(きじむなーも大人になったもんよのお・・・冷静に事実をみておる)

「おばあ。次の案件の準備はできてる？おばあ次第でGOだからね」

「あい、わかったよ。出発の準備はできておるぞ。いつでもOKじゃ

「じゃ、あす早々に決行ね」

「らじやー」

おばあとキジムナーは次の案件処理にあたろうとしていた。

\*\*\*\*\*

都会の喧噪を通り越した町はずれの一面に、公営施設のアパートら  
しき

建物があつた。

「なんじゃこりゃ？」

「うわあ・・・腐った牛乳じゃないかな・・・」

「まるでゴミ屋敷じゃ・・・」

「まんまだね」

「ここ、入って行くの？」

「しかたないよ・・・」

2人は、ゴミをかき分けて、依頼人の元に進んだ。

「もしもし、そなたが依頼人かのお？」

「あ・・・そうです。私です。」

「とりあえず事情を聞いて、望みもきいておく」

「はい・・・私は若いときから、いろいろな男性とつきあってきました  
が

長く続くことはなく、子もおりましたが、男性に夢中になってしま  
い

子供のことはほったらかしでした・・・

結局、私は良い男性にはめぐり会えず、最後に付き合った男性に

悪い病気を移され、後天性免疫不全症候群（AIDS）になってし  
まい

感染症を起こしてしまいました・・・

もう助かりません。最近は食欲もなく、このありさまです」

頬はこけ、やせほそり、衣類の上からもあばらがわかるほど

その女性はひからびていた。

「ほとんど動かずじっとしていましたが、近くを通った幼稚園児の歌  
が

耳に入ったのです。

『マリアさまのこころ、それはあおぞら

わたしたちを つつむ ひろい あおぞら

マリアさまの こころ それは かのき

わたしたちを まもる つよい かのき♪』

その時、私は悔い改めようと思ったのです。子供は成人しましたが  
どこに行っても疎まれていました。なぜなら、人を見て態度を変え  
て

自分より弱いものにはひどい仕打ちをし、力あるものには

媚びへつらっていたのです。自分にとって益のないものには

徹底的にあしげにし、罵詈雑言を浴びせこき降ろしていました。

そんな様子を人づたいに知り、大変後悔いたしました。

私がこの子に愛を注がず、しつめもしなかったことから

非常識で非社会的な人間に育ってしまったことを

心から悔いたのです」

(太郎、資料をちようだい)

(おばあ、これ)

「……なるほど……そうとうひどいな。」

それでは、そなたは何を納めようと思ったのじゃ?」

「はい、病気になってからは働くこともできなかつたので、

編み物をしていました。向こうの棚にマフラーや手袋、手提げかご等があります。

これらを私の子供に渡して、私のこれまでを謝罪したいのです。

また、残りは施設に寄付をして、親のいない子供達に差し上げて欲しいのです。」

「わかつた。そなたの気持ちを届けるとしよう。」

思うに、そなたも親の愛を受けずに育つたのじゃな。情状酌量の余地はあるようじゃ。」

「ありがとうございます……どうぞよろしくお願いします」

そう言い残すと、女性はゆつくり目を閉じた。

ぽちゃん

やせ細った魂は、虹色の浄化槽に送られた。

「おばあ?・あの子。まごちゃんが言つてた。両親はつぼに吸い込まれちやつたけど

銀閣叔父さんや紫伯母さんに、愛情たっぷりに育てられたから、私は幸せだつて。

愛つてさ、与えられれば与えられるほど、豊かな人に育つんだね。愛を受けたかどうかつてのが、人格に影響するんだつて思った。

僕も木の精霊達に、めいっぱい愛されて育つたから、すごく幸せだもん」

「そうじゃな。形は違つても、愛をたっぷり受けて育つた子は、情緒も

深いし

思考もしつかりとしておる。自分で考えることができるし、勉強や向上心も高い。

愛を知らない人間は本当に気の毒じゃ。人を愛して愛されて、そして人間は

豊になっていく。相手を思いやれるのじゃ。

おまえも大人になったら、まこと幸せになったらいい。暖かい家庭が作られるじやろ」

「おばあああああああ!!!」

「これこれ、おまえのハグ、強すぎるわい」

おばあは、成長したキジムナーが久しぶりにハグをしてきたので照れてしまったようだ。

く。  
懐深いおばあと心暖かいのキジムナーの魂浄化の旅はまだまだ続

## 相棒の誕生話

「二仕事終わると、風呂が気持ちいいのお。」

なんちやら森林の香りとか、柚の香りとか、気分で選べるのがいいねえ〜

長いこと生きていると、いいこともあるもんだ」

おばあはお気に入りの入浴剤をたっぷり入れた湯船にゆつたりと浸かっていた。

「そういえば、太郎との出会いもセンサーショナルじゃったのお。

あの雷雨の日、がじゅまるが雷に打たれて、そのそばにちっちゃいキジムナーが

号泣しておったな……

親木のがじゅまるがまつぶたつになったその横で……」

おばあはキジムナーと初めて会った日の事を回想していた。

「みやあみやあ泣いていたキジムナーを連れて帰って

ミルクだのおむつだのとありあえず、銀閣から貰うて世話して……  
だいたいおむつに男用と女用があるなんて、知らなんだ。

今時って、すごいねえ……紙おむつって出始めのころは

男女なかったと思うわ。トイレットトレーニングのために、わざわざ布おしめを

使う人もいたし。布だと不快だから、すぐに排尿を訴えて、おむつはずすのが

早くなるってね……

子供産んだことないのに、子育てすることになっちゃって……

あつという間に太郎もまこも大きくなりよってからに」

それまでは、おばあは妖怪連盟から指令を受けて、困った人の相談に乗っていた。

今はバイトで手紙相談だけを受けているが、当時は東西南北、世界各国を股にかけ

相談者に面会に行っていた。

ある時、おばあが手紙相談を受けた際、異空間移動能力を使って

遠隔地に到達した。そこで、死後、魂を浄化してほしいと頼まれたのだった。

なぜ依頼人はそんな事を頼んだかという点、その人物は魂浄化層の存在を知っていたからだ。

依頼人は西洋僧侶で、聖職者として罪をおかしてしまったため、おばあに

死後の魂浄化を依頼した、というのが魂浄化作業のはじまりだった。

ちなみに、この聖職者の罪とは、異性を好きになってしまったのであった。

人間として生まれてきたならば、異性を好きになるのは自然のことであるが

この西洋僧侶の場合、人々に奉仕するために結婚はせずに神様の意向に沿って

人々を助けます、という誓いを立ててしまった以上、恋に落ちてはいけないと

思いこんでいたからだ。

実際、西洋僧侶になっても、職を辞めて結婚した例もある。男女共に

聖職者だったが、一緒に奉仕活動をしているうちに、惹かれ合ってしまった。

そのままでは当然禁断の恋であるが、一旦辞職してしまえば、神の祝福のもと

家庭を築き守り、子を社会に送り出すという使命に変更されるだけのことだ。

しかし、おばあに魂浄化を依頼した西洋僧侶はそのどちらも捨て去ることができず

罪にさいなまれ自暴自棄になってしまった。

この西洋僧侶に会おうとした時には、まだキジムナーはちいさかったので

ひとり置いていけないため、やむを得ず、おぶって連れていった。

すると、キジムナーはどこから持ってきたのか、おばあの背中から手を伸ばし木の枝を渡したのだった。おばあがその枝を振ると、突如車が現れた。それが、今利用している異空間異動号である。

普段から子供用のゴーカートを乗りこなしていたキジムナーはおばあの背中から降りると、すつとその車に乗り込み、さつそうと運転を開始した。

その時から、キジムナーはおばあのアシスタントとなって魂浄化の行脚をするようになった。

「太郎も成長したのお。こどもなんてあつという間に大きくなるもんじゃ。」

小さい頃は、よく生まれ育った森林に連れて行って、銘木古木達に絵本を読んでもらったなあ。

おかげで、あの子も本が大好きになりよった。

他にも、まこが読んでいた本を借りてきたり、こつちにあった本を持っていたり

妖怪連盟から送られた本を共有したり。

本を読むことは子供の情緒発達に良い影響をあたえるもんじゃ。うん。

それにしても、いろんな物語を考える人がいるんじゃなあ。

最近はネットでも読めるから、わざわざ本屋に行かなくてもよくなった。

ネット小説は、なかなかおもしろいからたくさん読んでみたくなつてしまつて、

時間が追いつかないわい。みんな本当に上手じゃ。

浄化作業の合間に見るのが楽しくて楽しくて。老後の楽しみにとつておけんわい。

つて、わしの老後っていつ???

更新が楽しんじゃなあ。」

昼下がりのおばあのひとりごとだった。

## 年度末浄化

「お婆あ。今日、年度末だからさ、次に浄化する魂のリストアップしておくからみておいてね」

「おう。いいよ。昨日おとなりさんから、差し入れもらったからお茶しながらゆつくりみとくわ。

おまえも、いただくといいよ。オジバのおいしいチョコだからね  
味わっておたべ」

「わく!!!ブランドものチョコ!!!なかなか手に入らないね！」

それでは味わって頂きます！」

「もー、年度末ってね・・・おとなりだと2月が学年最後で

3月が新学期だっけ・・・ビジネスイヤーは4月かな？

とにかく忙しいのは苦手じゃ。ゆつくりじっくり順番決めようかねえ」

この時期になると、日本の場合お彼岸と重なって

魂浄化の依頼がぐっと増える。西洋からは、ハロウィーンの時期やクリスマスが比較的多いが、集中するということはあまりない。

「なにになに・・・」

・自分がトップの俳優になりたくて、追いつけてきた後輩俳優をおとし入れた。最後は自分が薬でつかまって、奈落の底に落っこちた。反省したい

↓強欲が招いた悲劇じゃな・・・ちよつと保留。

・浮気をした旦那を呪って、わら人形したら、ほんとうに死んじゃった・・・そのあと自分にも不孝の見返りがあって孫などが苦労している。反省したい

↓こわっ！だから、人を呪わばっていうのよ・・・呪っちゃいかん！

慎重に処理、じゃな・・・

・子供を思い通りにしようと、むりやり勉強させ

無理矢理進学校に入れ、無理矢理トップレベルの大学に入れた。入ったまでいいが、不登校になり、退学してしまった。

その後、就職もせず、引きこもってしまった。

自分も職場では居場所がなくなり、妻も離れていってしまった。

思い通りの人生なんてないんだ。子供を尊重してやればよかった。

超反省。

↓もつと早くきづけよ、つて話しだなあ・・・

子供は自分の所有物じゃないんだよ。主体性を尊重しなくちゃ

んー。これ先かな？おろかではあるが、更正力はあるそうじゃな。」

まだまだ案件は山のように積んである。

いちおうキジムナーが、優先順位を考えて、順番に並べてくれたがどれもこれも、心が痛むものばかりだった。

貧しい国々では人々は敬虔に祈りを捧げている一方で

先進国はどうしても奢りがち。本来の絶対的な存在である

神を軽んじ、科学が全てと傲慢になる人々が少なくない。

ただ、優秀な科学者になればなるほど、科学では及ばない力があるということに

気づく。実力のある医者や科学者がカトリック信者だったり、

仏教を重んじたりということは、めずらしくない。

おばあは、浄化プランをする一方で、人々の啓蒙をしなければいけないのではないかと

啓蒙プランをパワーポイントで作り、上様に提出してみようと

密かに計画をたてているのであった。

## 啓蒙プラン

「なあ、太郎」

「なに、おばあ」

「ちよつと思つたことがあつてのう」

「どうしたの？ 案件リストなんか問題あつた？」

「いや、太郎のリストはいつも完璧じゃよ。助かるよ」

「他になにか？」

「うん、啓蒙をせないかんと思つてな」

「啓蒙・・・？ 誰を？」

「誰というか、そこからはじまらんと、人間墮落の

一途をたどるのではないかと思つたんじゃない」

「あー、たしかに。学校の教育だけじゃ足りないかも。

倫理というか常識というか・・・」

「太郎、若いのに良いところに気づいたのお。

そうなんじゃ。おまえのように、自分で気が付く子は

自分で勉強したり、学ぶ力が備わっているんじゃないが

そうでない子は、もともとということもあるうが、環境が

悪いと思うんじゃない」

「あー、それは言えるかもしれないね。僕もマコちゃんも

良い環境にあつたと思うよ。自然の中でいっぱい遊んで

いろんな発見があつたし、周りの大人に守られながら

のびのび育つたから、心がしっかり育つたと思う。

必ずしも親じゃなくて、いいんだよね？ 心から愛してくれて

守ってくれる大人がいると、安心できて、自分に自信ができて

強くなれると思うんだ」

「太郎・・・おまえは、ほんとうにすばらしいのお。

おまえやマコのような子達が増えてくれれば、浄化作業など

不要になるんじゃないかな・・・」

だから、啓蒙をしていつて、愛が如何に大切か

子供を育てる上で、見守り励ますことが大事じゃと、

小さいうちから教え、またその親たちにも教えていかねばと  
思うんじや」

「ぼく、思ったんだけどさ、もともとの性格もあるけど  
やっぱり、環境って大事だよね。」

兄弟が何人かいて、みんな性格は違うけど、同じ親で育つと  
常識っていうのかな？基本概念がさ、ちゃんと植え付けられてるん  
だよね

だから、出方は違うけど、根本的なところでは、正しい倫理観を  
持てるんじやないかなって思う。それに他人に対する思いやりも  
育ってる。

また、親も人間だつてことがわかつて、反面教師にしてる人も。  
人間だから完璧じゃないからね。親の欠点から学ぶって姿勢も  
大事なんだよね」

「そうなんじや。だから、浄化作業と同時に啓蒙作業も  
行ったらどうかと、上様に申し出ようかと思っておる。」

わしが骨子をパワーポイントで作っておくから、効果を太郎にお願  
いしたいんじや」

「いいよーあれだね。グラフ化したり、アニメーション効果入れたり  
動画いれたりして、わかりやすくすればいいんだよね。画像なんか  
の

データはまかせて！」

「ありがとよー。そうなんじや。補足資料を集めるのが

時間かかるからさ、太郎仕事早いから、やってもらおうと助かるよ」

「朝飯前さ！浄化プランリストと同時進行するから！」

「浄化行脚もエネルギー使うからのお。同時に啓蒙作業をしていけば  
浄化リストも減っていくと思うんじや。というか、そうじやなきや  
困る。」

世の中デジタル化すすみすぎて、心の教育がおざなりになってるか  
らね」

「うん。愛の啓蒙運動をしよう!!」

「太郎、よろしくな。あんまり無理せず、たまにマコとも遊びに

いっていいからな。煮物と和菓子作っておくから」  
「うおーい!!!ありがとーいやる気100倍!!!」  
がんばろうねっ、おばあ!」  
「サムズアップ」

## GWスペシャル

「ねえ、おばあ、なにやってんの?」

「お、太郎、ひさしぶりじやの?」

「え? たった2週間程でしょ? おばあの長い人生からみたら  
ほんのコンマ数秒ぐらいなもんでしょ」

「おいしくできだぞ」

「(え? 無視?)... あ! 桜餅? でも、時期ずれてね?」

「だって、大好きなんだから。これはマコに持つてつてくれ。」

あの子、つぶあんはNGだけど、こしあんなら好きなんだって」

「え、僕、つぶあん好きなんだけどなく」

「そういうと思つて、ほれ、こつちは粒あんバージョン」

「ひやつほー! !! さすがおばあ」

「今年はゆつくりできそうじゃからの。料理したり

片づけしたり、まったりしつたところじゃ」

「あ、ほんとだ。広くなつてる」

「いらんもん、ぜー! んぶ捨てたし、おもちゃ類は

孤児院に寄付して、本は欲しい人にあげた」

「へ〜いつの時代の?」

「教えない」

「いじわるっ! ま、いいことしたんだからいいよね」

「いいことといえればいいのかな... わしの部屋がすつきりして

助かつたと思つておるんじやが...」

「おばあにとつても良いことで、もらった人達も

喜んだんだからいいんじゃない?」

「まあね... でさ、太郎、まだみたくないけど、GWあけの

案件つてどんなの?」

「えつとね... ありや。おばあがいやがるヤツだわ。」

『連続殺人事件』だつて」

「え〜やだあ。きつと西洋とかでしょ? ピストルもつて

バンバンバーン!! 系の?」

「それって、鉄砲もってバンバンって

ど〜れ〜にしくようかな?・・・れれれのれ、じやないの?」

「え?そうなの?うちはね、『ぶーところてぶーところてぶーところてぶーところてぶーところてぶーところてぶーところてぶーところてぶーところてぶー』  
もーびーとーつおまけにぶーところてぶーところてぶーところてぶーところてぶーところてぶーところてぶー』  
ぶ」

だったよ?」

「おばあ、関西人なの?」

「ううん。でも、それ流行ったとき、京都からの転校生がいて

その子が流行らせたの」

「いつの時代?」

「おしえない」

「はいはい、わかりました。でね、おふぎはこのぐらいにして

案件だけどき、お察しのとおり、西洋のすっぺいんだそーです」

「いやだいやだいやだ。バルセロナで

サグラダファミリア教会だけみて、帰ってくるう〜」

「おばあ、時代遡ったら、まだそんなに出来てないんじゃない?」

「いつの時代?」

「おしえない」

「じゃ、いかなーい」

「おばあ!いい加減にして!」

「・・・わかりました・・・せめて

桜餅全部食べてからでいいでしょ?」

「いいよ。てか、GWあけでいいんだから」

「わかりました・・・なんとかします」

「新茶買ってきてあげるからさ。準備してて。

僕はマコちゃんが電子辞書欲しいって言うから、

今から届けるよ。おばあの桜餅も間違いなく渡すから」

「へえい・・・ありがと」

「じゃ、行ってきます!」

しばらくしてキジムナーが戻ってきた

「おぼく。桜餅絶品だったあ。おいしかったよ。

マコちゃんも喜んでた」

「そうか・・・それはよかった」

「なあ、太郎、この案件さ、最初にかたづけ

それからGWゆっくりしない？」

「ん？いいよ。やなこと最初にやっちゃおうよ」

「うん。。。そうする」

「やけに素直だな・・・」

「では、いきませう」

「早っ！」

びゅん！ぐたぐた言っていた割には

やけに行動が早かったおぼあ。

案件先のすっぺいんに着いた。

「太郎、どろぼーが多いから、気を付けるんだぞ」

「あいよっ」

「しかし、連続殺人しといて

悔い改めようって気持ち、ほんとにあるのかね・・・」

「うん・・・連続っていつても子供だからね・・・残忍すぎるよ」

「はあ・・・会うのやだけど、しゃーないな」

おぼあとキジムナーの2人は

闘牛場の裏を通って、細い路地を入っていった。

路地を抜けると、煉瓦の大きな家が見えた。

「おぼあ、ここ」

「ひえくえらい金持ちじゃね」

「うん。表からじゃなくて、裏からきてください

だって」

「どこが裏か表かわからんな」

「ナビあるから大丈夫だよ。おぼあついてきて」

2人は屋敷に入っていった。

キジムナーのナビに表示されている通りに進むと

部屋の前でセンサーが光った。

「あ、この部屋みたい。入ってみよう」

コンコン。

「Adelante」

「入ってか？」

「あ、失礼。魂で話しかけます」

「そなたが、連続殺人犯か？」

「そうです。」

「まだ若いのに。学生か？」

「そうです。理学部の大学院で研究中でした」

「なぜに罪もない子供を殺めたのじゃ？」

「はい・・・博士論文が通らず、むしゃくしゃしました」

「だからといって、なぜ子供が犠牲にならねば

ならんのじゃ!!」

めずらしく声を荒らげるおばあ

「もう、これ以上不孝な人達を増やしたく

なかったのです。私のように、親の言うなりになって

自由が全くなく勉強の日々で、進学しても楽しいことなどなく

日々研究を強いられる毎日でした。

人によつては研究が大好きで夢中になつてゐる事もあるようですが

私の場合は絵描きになりたかつたのです。

芸大に進みたかつたのに、親に猛反対され、仕方なく

理学部に進みました。

私のような不孝な人を少しでも減らしたいと思つたため

子供に手をかけました」

「思考発想が稚拙じゃな。関係ない人を殺めて

お主の欲求が満たされるのか？」

「申し訳ありません・・・そこまで思考が及ばず

心神喪失状態のまま、行為に及んでしまいました・・・

しかし、最後に殺めた一人が『おにいちゃん、これあげる』

と言つて、折り鶴をくれたんです。彼は日本人とスペイン人のハー

フで

日本にいた頃、おりがみをしていたらしく、それを私にくれたんです。

その時に、自分のしたことの大きさを知ったのです」

「気づくのが遅いんじゃない！お主の魂など救いたくない！」

「おぼあ・・・気持ちわかるけど、仕事しないと・・・」

「わしにだって拒否権はある！自分だけが被害者ずらして

純粹無垢な子供に手を出すなんてゆるさん!!!

おまえなんか、ずっと地獄をさまよつとけ!!!」

「おぼあ！」

「はい・・・私のようなものは天国に行けるなど

決して思っておりません・・・ただ、大学院に進む前に

薬学部時代開発した、この薬で、花粉症を減らすことができるのです。

日本では花粉症が酷いと聞きました。

最後に私に悔い改めるきっかけをくれた子がいた日本の子供達が

花粉症に苦しまずに元気に遊べるように。

私のような人間にならずに、のびのびと精一杯遊んでほしいと・・・

そんな願いをきいていただきたくて、依頼状を出しました。

私の魂は浄化できなくても結構です。この薬だけ

お渡しください」

「・・・・・・・・・・・・・・・・生まれ変わったら何になるつもりじゃ」

「私のようなものは生まれ変わる資格などございませぬ。」

「わしもそうしてほしいが、規則じゃからな。心から悔い改めている者には

救いを与えるという。」

「それでは、修道士になれましたら幸いです。一生、奉仕と祈りをささげ

困った人々を助けます」

「わかった。そなたの願いが叶うよう、しっかりと魂の修行をすると  
よろこぶ」

「ありがとうございます……恩に着ます」

ぽっ

ちゃん

殺人を犯した男は、警察がくる前に劇薬を飲んで自室で自らの命を絶っていた。

「おばあ、やっぱりさ、啓蒙プランも同時進行したほうが

よさそうだね」

「そうじゃな……わしらの力でどうにもならないことばかりじゃけど  
わしらでできることもあるからのう」

「うん。マコちゃんもできる事があつたら、協力したいって」

「そうか……マコには現場に行かずに、事務処理を頼もうかのお」

「それがいいね！遠隔操作でデータ送信とかしてもらえるし。」

場合によっては、武器の調達もお願いできるからね」

「そうじゃな。温泉浸かってから帰ろうか」

「らじゃー！」

おばあとキジムナーの浄化紀行はまだまだ続く。

近日、新しいメンバーが加わりそうだ。

## メンテナンス中

「はーっ、ごっしごっし……うむ。結構きれいになったな」

おばあは商売道具の水晶玉を磨いている。

この水晶には浄化後の魂の行方が映像化される。

次にどこに生まれ変わってどんな人生を送っているか

キジムナーが受信するデータは文字化され

動画はこの水晶玉に映し出される。

浄化した魂を持った人間が、新しい人生をしつかり

正しく生きているのを見ると、この仕事しててよかった！

と、長生きのメリットをしみじみ感じている

おばあ。本名を「紫・ばばあ」(ほんとか?)

これまで浄化した魂は数知れず。

しかしながら、どうしてこうも、汚れまくった魂ばかり

世に溢れているのだろう……

人間は生きて修行をして徳を積んで

天国の門をくぐり抜けられるはずなのに

その資格すら手にできない輩が

多いこと多いこと……

「啓蒙プランの承認はまだおりんのかのお」

懺悔するような大失態を招く前に

まず根本の生き方を変えねば、と

上様に啓蒙プランをパワーポイントでキジムナーと

作って提出したおばあだったが、まだ返事はこない。

「上様もお忙しいのはわかるが、とつとつと

お返事をくださらんかのお……」

ピン！

「お！メールじゃないかな？多分上様からじゃ」

キジムナーは健康診断中で留守だった。

「どれどれ、太郎の代わりにわしがチェックしておこうつと」

メールの送信元は、上様ではなく

「どうやら管理局からのようだった。

「え???なに???太郎の健康診断結果?」

「血糖値が高いから、再検査が必要???」

「なんでじゃ???血糖値高いって、あの若さで」

「糖尿病かいっ!!!いかん・・・」

「はっ!この間、桜餅を持たせてしまったじゃないか・・・」

「啓蒙プランの前に、太郎の健康キープしなけりや」

「いかん!」

「おばあは早速血糖値に効く薬を調達しに」

「銀閣大王の所に出かけた。」

「ただいまー!ー、おばあ。あれ?おばあ?」

「おばあと入れ違いにキジムナーが帰ってきた。」

「なんだよ。留守?てか、なんの伝言もなしに」

「出かけて行っちゃったよ・・・なんか急用だったのかな?」

「おばあは超高速8倍速モードで、銀閣に事の次第を話し」

「魔王家秘伝の薬草を分けて貰っていた。」

「銀閣さん、ありがとう!」

「お礼もそこそこに、おばあは杜の事務所に戻ってきた。」

「あ、おばあ。なにしてたの?伝言もしないで留守って」

「物騒だなあ」

「あ、太郎。健康診断の結果がきてたよ」

「え?診断?異常なしでしょ?」

「それがさ、血糖値が高いって。だから、銀閣んどこ行って」

「薬草もらってきた。これ煎じて飲めば、血糖値さがるから」

「え?おばあ、わざわざ銀閣さんのところに、薬草取りに」

「行ってくれたの?」

「うん。だって、太郎になにかあったら困るもの。」

「お、おばあ・・・(感激中)」

「(太郎が動けなくなったら、わしひとりで仕事せねば」

「なんないもん。やだそんなめんどのの。)」

「太郎。体は大事にせねばな・・・(いい人演じ中)」

「お婆あ、ありがとう！・・・てか、いま、テヘペロってしなかった？」  
「へっ？してないよ。するわけないじゃん！」

「んー、どうも怪しいな。ま、でもいいや。僕だって  
体調崩れるのやだからね。お婆あが煎じた薬草、ありがたく頂く  
よ」

「ああ。それよりおまえ隠れて甘いモノとか食べてたか？」

「隠れて・・・じゃないけど、お婆あが隠してた

あめりきヤーのペろペろキャンディー全部いただいたよ？」

「へ???なんで???なんで食べちゃったの？」

あたし、楽しみにしてたのにっ!!!」

「お婆あ。恐ろしいほどの蟻が群がってたんだよ・・・

僕は蟻を食べても大丈夫だから、一緒にいただいたの。

じゃないと、蟻地獄ワールドができあがりそうだったからさ」

「うえー！ー！ー！・・・仕方ない・・・

わしは虫は食べんからな・・・は虫類は食べるけど。

しーないなっ」

「あんな糖分の固まりみたいなのーダースも食べたから

一時的に血糖値が上がったんだとおもうよ。

たぶん、これからは酢や牛乳、タマネギスープとか多めにして

あとはヘルシー食にしてたら大丈夫だと思うよ。

いつものお婆あの料理で！」

「そ、そうじゃな・・・（あの飴ひとりでたべたんかいっ!）」

「再検査はいつ？」

「え?あ・・・いつでもいいらしいよ。事前に連絡すれば

いつでも受診できるって」

「そっか。それなら1週間後に行ってくるよ。それまで

糖分は一切とらないから」

「お、おう・・・それがいいな。食事も砂糖入れない食事にするから」

「お婆あ！ありがとう！あ、あとね。啓蒙プラン

OK出てたよ」

「え???なんだ、そうだったんかい」

「ごめんごめん。健康診断前に受信してすぐに

重要フォルダに移動しちゃった。帰ってからおばあに話そうと  
思ってたからさ。あとで、会議しようね」

「うっす・・・お茶菓子は酢昆布とかそういうのにするね」

「うん。おばあは気にしないで甘いモノ食べていいからね！

でないと、発作おきるでしょ？」

「いやあ・・・わしもちよつと禁甘するよ・・・」

「じゃ、2人でヘルシー三昧楽しもうね。あとで山菜取ってくるよ」

おばあとキジムナーのヘルシー生活がスタートした。

大切な日なの？

「たろー、啓蒙プランちよつとまっちくり。

相談きちやったよ」

「え？なに？」

「ほれ、おまえが負傷したときにお粥届けてくれた

人からじゃ」

「ああああ！あの人ね。なんだって？」

「なんでも、大事な日が迫っているのに

なんにもできなくて、どうしたらいいかって相談」

「あー。わかった。僕が森で会った子の

おじさんだね？」

「おそらくそうじゃな。その人の大事な日が迫っていて

本当はお祝いたいたいそうなんじゃ。

しかし、どうやってお祝いたらよいか困っているんじやと」

「んく。僕がメッセージ届けてあげてもいいんだけど・・・」

「そうなんじやが、おまえがいきなりその格好で

行ったら、『はい？』って、訝しげにみられちゃうじやろ？」

「そうだよね・・・それより、玄関開けてもらえないかも」

「あの格好でもまずいしね？」

「うん。緑のあの格好でもさ、本当の人がきたら

『あんただれぞなもし？』って言われちゃう。

へたしたら逮捕だよ」

「だろく？ポストに入れたところで、本人に届くかどうか

わからんじやろ？」

「だよね。直接渡せればいいんだけど、かくかくしかじか・・・

【超高速30倍モード】で話さなくちやいけないけど

そもそも話を聞いてくれるかどうかわからないもの」

「わしがいったら、もっと怪しいしのおく」

「おばあ変身できないの？」

「できるけどさあ・・・なにに変身するの？」

「あの女性」

「えー？だって、本人じゃないからだめじゃん！

『あたしは代理です。化けてます』って言ったら

それこそ『はあく？』だぜ？」

「なんか僕ら、不毛な会話してない？」

「そうなんじゃ・・・むしろが持っているのは、

罪を悔い改め魂を浄化させることに特化した能力じゃからのお・・・

良き人にも手をさしのべてあげたいんじゃないが・・・

何か良い手だてはないのかのお？」

「過去に飛んで、行ってみるとか？」

「いつの過去だよ？」

「・・・だよね・・・ふう・・・」

「こうなったら孫ろっ空にでも頼むかのお？」

「ええええ？あいつ、ひとの助けとかする？」

「・・・しない。買収しないとなんにもしない」

「でしょ？そんな予算ないよ。うちには」

「だよなあ。なんとかかしてあげたいなあ」

「ピンポンダッシュは？」

「で、どうするの？」

「ピンポンして、出てきたら、おばあが声色かえて

あの女の人の声で、おめでとう！って言う」

「太郎・・・だったらさ、それ、本人がやれば

良くない？」

「・・・確かに・・・」

「しかも、それ怪しいし。ヘタしたらいたずら！って

通報されちゃうし」

「だよねええ!!僕を助けてくれた人だから

僕もなんとかかしたいんだよね・・・」

「そうだ。おまえ、少年の方に会ったらどうなの？」

「あ！そうだね。あの子に伝えてもらったらいいんだよね？」

「探し出して、手紙渡したら？」

「そうだね・・・あの子は子供だから、僕をみても  
びつくりしないし、森で会ったときも、道案内したら  
喜んでくれた」

「とりあえずその方向でがんばってみや」

「よっし。じゃあ、おばあの相談案件、僕が

引き受けるよー！」

「うまくいくように、祈ってるよ。和菓子作っておくから。

つぶあんじゃなくて、こしあんがいいんだっけ？」

「逆く。まごちゃんがこしあん。あ、でも、僕も最近

どっちでも大丈夫になった！」

「健闘を祈るー！」

「らじゃー！」

## 6次元ポケット

そろそろ入梅の時期。

いろいろ気を付けないと食中毒が怖い季節である。

キジムナーやおばあは人間ではないにしろ

食中毒を起こしたものの残骸に触れたりすると

アレルギー症状を起こす。

そんなときは80度以上のお湯に

20分以上浸かると、だいたい滅菌されるが

活火山近くまで出向き、80度以上の源泉を探さねばいけないため

ちよつと不便を強いられてしまう。

「太郎、これ、除菌しておいて」

「うん。去年はひどかったからね……」

僕がうっかり、カビた饅頭食べちゃって

それでのうちまわっちゃったんだよね。」

「ただのカビならいいけど、虫が食べたところに

繁殖菌があったからのお……。解毒するのに

大変じゃったな」

「そうそう。まごちゃん、Eらえもんさんのところにいつて

『6次元ポケットから、瞬間滅菌スプレーください！同時に熱も

下がるらしいですから！』って、強引にもらってきちゃったんだよ

ね」

「そうそう。まごの必死の看病で、太郎もすぐに回復してお……」

わしも解毒薬草を作っておったが、瞬間滅菌スプレーとは

思いつかなかったなあ……

6次元ポケットの存在すら、思い浮かばなかったよ」

「だよねえ。僕もびつくりしたよ。『6次元ポケットからだしてくだ

さいー！』

って、頼んじやう発想がすごいよね」

「いやあ、さすがわしの姪娘じゃ。愛する人のためならなんでも

しちやうってか、ひらめきが、天から降りてくるからのお」

「まごちゃんにはほんとーに感謝しているよ。

食中毒がらみの腹痛って、はんばないからね」

「人間でも相当だからね。あたしら妖怪にとっては

痛みが倍増しちゃうから、厄介だ。めったなことじゃ

具合悪くならないんだけどね」

「だから、僕は梅雨がきらいだあゝ」

「わしも、日本の夏、キンシヨールって

風情はすきじゃが、湿気があかん」

「そろそろそんな季節なんだよねー。おばあ。

おばあは今年の猛暑対策なにかある?」

「ない・・・とりあえず、梅干しキープしてるぐらいかな」

「あー、大事だよな。疲れ取り、滅菌もあり」

「つくるの大変じゃから、最近を買ってるよ」

「いいんじゃない?おとなりのお国でも、リムチ漬をわざわざ

作ってるところって少なくなってるらしいよ。」

「この国も浅漬けぐらいじゃもんなあ。ぬか漬けとかやってるところ

あるの?」

「どろかけばーさんは、つくってるらしいよ。

このあいだ、通りがかったら、つくってたもん」

「どろかけなあ。あいつん家の畑はガーデニングの

お手本みたいな庭じゃからなあ。こんど、なんかかすめてくるか」

「かすめて・・・なんて、おばあったら。おばあ煮物とか

持ってたらしいじゃん。あと、最近はまってる

牛乳からつくる生乳キャラメルとか」

「ええー。あれ、自分で楽しむ為につくってるからあゝ

人になんかあげたくないゝ」

「せ、せい・・・。あ、そうだ

また案件あがってきてるよ」

「みたくない・・・」

「そうなんだよね。今回は、僕もあまりみたくないものばつかで」

「てか、そんなの浄化させたくないってのばつかじゃないか?」

って、予想は立っておる」

「ん……でもまあ、そうじゃないと地獄の

悪魂ばかり増えちゃうから、少しでも多く浄化しないと……」

「はあ……この世から罪つてもんは

消える日がくるんだろうか……」

「おばあ。それが僕らの仕事だからね。放置したら

消えるどころか、増え続けるから、なんとかしていかなくちや。

やっていくうちに、名案も生まれるだろうからね。

まこちゃんだって、そのうち強力な戦力になるから

おばあもがんばってよ！」

「へい……そうじゃな。やらなければ

悪くなる一方じゃからな。

無理せずちよつとずつやっていくとするよ」

「うん。ガス抜きも忘れずに！」

## かなへび

「ねえ、おばあ！」

これ、ちーちゃんからもらった！」

初夏の早朝、キジムナーが息を切らしながら室内に入ってきた。

「なんじゃ？お！かなへびじゃないか」

おばあは、ちいさいかなへびを掌にのせると

ちやいろの背中を愛でた。

「おう。。。かわいいのう。なに、これ、ちーちゃんが

つかまえたの？」

「そうみただよ。にこにこしながら、僕にくれるからさ。

いいの？つて、いったら、おにーちゃんにあげる！つて」

「ちーちゃん、もう人間でいえば、小学校ぐらい？」

「そうだね。1年生ぐらいになるんじゃない？」

「大きくなったものよのお」

「ねえ、このかなへびどうする？飼う？」

水がいるし、虫とかつかまえてこないと、飼育できないけど？」

「うーん。飼いたいなあ。かわいいからなく。」

おばあ、だめ？」

「だめつて。。。いいけど。自分で飼育するなら・・・

ただ、留守中どうするの？餌とか水とか」

「んー、まこちゃんにお願いするとか・・・」

「まこは、は虫類苦手じゃなかった？」

「いや、大丈夫みたいだよ。節足動物はちよつと

苦手みたいだけど・・・」

「それじゃ、餌のクモとか、だめじゃん？」

「んー。。。おいらが捕まえて、まとめて

おいとくとか・・・」

「まとめちやいかなだろー」

「んー。。。結構留守がちだからなあ・・・」

「かわいそうじゃから、今回は逃がしておやり」

「んにやく．．．．．仕方ない．．．．．そうするか．．．」

「かなへびだつて、恋のひとつぐらいたいやろ？」

「うぐつ．．．．．そつか．．．．．愛しいひとと離れちゃったかも  
しれないもんね．．．．．」

「そうそう。なんでも、つかまえてこつちの勝手にするのは  
かわいそうなんじゃ。」

ところで、太郎や。泥かけばあから梅もらったんだけど  
おまえ、梅酒作れる？」

「梅酒？カリン酒なら作ったことあるけど．．．．．」

「同じ要領じゃね？」

「そうかなあ？ちよつとぐぐつてみる？」

「そうしてくれ。たくさんあるから、もったいないんでね。  
すぐにとりかかってくれたらうれしいよ。」

作業のあとの梅酒はおいしいぞく。梅干しはじかにかかるから  
梅酒がいいかと思うたんじゃ」

「そうだね。おいらも梅酒なら飲めるからね」

「ん？おまえR—15じゃないの？」

「妖怪にR—15とかあるの？」

「しらん．．．．．でも、アルコールは摂取したら  
なんか、よくなるかね？」

「焼酎なら大丈夫でしょ。泡盛でもつくれるけど  
度数が高いからな．．．．．ま、ちよびちよび飲むなら  
大丈夫だとおもいまーす！」

「わしら治外法権じゃからな．．．．．健康面だけ

管理すればいいことか．．．．．」

「そうそう、そういうことーじゃ、そろそろ

案件の整理でもしようかな．．．．．涼しいうちに  
やっこーつと。依頼中の案件もなかなかだからな．．．．．  
体力温存だ！」

## 遊べないことも

もわっとする湿気につつまれた

梅雨真っ只中

キジムナーはせつせと除湿のまじないをかけていた  
「ねええええ、おばああ！ここ、乾燥おわったよー」

「あい、ありがとねえ。快適快適。おまえ、ほんとーに  
掃除上手だねえ」

「へへー。森の仙人におそわったんだー。」

快適だと脳にもいいんだってよ？」

「そりゃあそうだ。で、次の案件事例は揃ったの？」

「あ、その前におばあ、相談案件が入ってたよ」

「どれどれ。すつきり快適になったところで

読んでおこうかのお」

「はいこれ」

キジムナーは、A4サイズにまとめられた

パワーポイント印刷データをおばあに手渡した。

「なになに……遊べないこともたち？」

「なんかさあ、この時代、子どもたちが大変らしいよ」

「ほおほお。なんでも人間のこの国の世界で昭和の頃は

子どもたちは、大人が介入しなくても、自分たちで

ルールを決めて、楽しく遊んでおったそうじゃ。

ところが、今は環境の変化に伴って、子どもは

外で遊ぶ機会が激減し、人と接触する機会も減った。

兄弟がいらない子ならなおさら。

昭和の時代は、違う年の子達が集まって、年長が

リーダーシップをとって、遊びを教えたり、ルールを

説明したり、思いやりをもって接していた。従って

楽しく遊ぶことができた。もちろん子供達だけで

ところが、最近は、ルールを決める際にも

おれおれおれおれ、で、自分を中心にルールを決めて

相手がそれに反すると凄いと、責め立てて  
まるでけんかするため遊ぶような、そんな状況に  
なっておるらしい。つまり、交通整理役の大人がいなければ  
楽しく遊ぶことができない。

そうすると、弱いモノや年下が犠牲になつて  
輪に入れなかったり、罵倒されたりするらしい。

なんと、悲しいことよのお・・・太郎？」

「ぼくの周りでは、そんなことなかったなあ。

木の精霊がかくれればしよを教えてくれたり、秘密の  
隠れ家とか伝授してくれたり、女子やちいさい子には  
やさしくしてあげてたけどなあ。」

「今は、知らないひとと口をきくと危ない！とか防犯の  
理由もあつて、自由に遊べないという、かわいそうな

環境の中でしか生活できないから、今の子は気の毒じやお」

「ほんと。公園でもおちおち遊べないよね。

実際にへんな人とかいるしさ。こどもをねらつてたりするしさ」  
「思うに、マスコミも大いに責任あるわな。

あれに洗脳されちゃってるから、正しい判断基準が  
育たず、人を罵倒する言葉が専攻してしまう。

うざいだの、きもいだの。  
なにげに使ってしまうわけじゃ。

言われた方は深く傷ついたりしてることも少くないのに・・・」

「ぼくがこどもたちの輪に入つて、あそんであげようかな？」

「おまえ、その風体で、『きもい』とか、言われちゃうんじゃないの？」

「はあ？きもいっていうやつがきもい！って言い返してやるよ」

「おまえは強いのお・・・今の子達は傷つきやすくて  
メンタル弱いから、おまえが優しく諭してあげたら

いいと思うよ」

「うん。ぼくは、凹まないから大丈夫！」

そして、みんなと仲良く遊ぶ方法を教えてあげるよ！」

「次の案件にうつるまえに、それ、やつといってくれる？」

忙しくなるけど。太郎、たのむぞ」

「うん、わかった。じゃ、とりあえず行ってくるね」

「道明寺作って待ってるよ」

「おばあ、ありがとう！」

キジムナーは木の葉カーに乗って

あそべないこどもたちの元に走っていった。

## お盆アカデミア

「いや〜。暑いのお。それにしても今年は暑い。

こんな中、妖怪ポストマンは朝から走り続けているんじゃないか。いくら体内変温装置があるにしろぶっ壊れるんじゃないかってぐらい、暑いからなあ。

わしは寒さには強いが、蒸し暑いこの国の夏は堪えるのお。

妖怪がりんごりんは管理局に体質特性返還申請でしたらしいな。なかなか賢いな。

あ、いや、太郎や、ちゅーちゅーアイス、がっちがっちに凍らせてあるから

適当に休憩入れて、お食べ

どうせ、これ見てる人いないんだし、超ゆる更新でいいんじゃないか？」

「は？なに言ってるの？・・・あ、おぼああ！！！！おぼああ！！！！」

ねえねえ、これみて！」

「なんじゃ？そんなに驚いて」

「五千万両だよ！お札があったよ！」

よつれよれになった封筒があって、捨てちやおうかなって

一応、中身みたら万両札が2枚も入ってたよ！

これでスイーツ1か月分ぐらいにはなるよ！！！！」

「ほお・・・太郎、きれいい好きじゃからのお。

暇さえあれば、整理整頓してる、その流れでそういうラッキー来たわけね

そういえば、妖怪がりんごりに麦酒チケットもらってたなあ。まだ使ってなくて

取ってあるわ。太郎が成人したら飲もうかと思ってたけど、おまえ成人するの？」

「どうだろ？妖怪に成人とかあるの？」

あ、そうだおぼあ、お盆だからさ、これのお札でお花買ったらどう？」

「そうじゃなあ。千年単位で見送った妖怪もおるしのお。

基本、妖怪って死なないと思ってたけど、とんでもないウイルスとかで

あつさりぽっくり逝っちゃったやつもいるでのお。供養しとくか」  
「じゃ、僕、お花買ってくるね」

「暑いから、水分補給忘れずにな。余ったら、なにか好きなもの買っておいで。お札はきつとお前がいつも頑張ってる働いているご褒美じゃよ。管理局の役人、釈迦シャカーンからの」

「うわあ！冷徹管理人かと思ってたなら、意外にやさしいんだね！  
じゃ、とにかく行ってくるよ！」

「行ってら！気を付けて！」

車内温度を低めに設定して、速度もセーブしながら

キジムナーは瞬速移動マシンに乗って、花を買いに出かけた。

「じゃ、太郎が出かけているうちに……と。」

関西ぐるぐるーの実写版DVD借りてきたんだ♪

今しかゆつくり見れないからね♪ 楽しみ（はあと）」

おばあは妖怪秋田事変から送られてきた『特製生もろこし』を  
ほおばりながら、煎茶を啜った。

【次の案件：名声に重きを置き家族を顧みなかった古典俳優】

「あー、なんかテーブルに置いてあるこれ、目ざわりじゃなく

映画観終わったらゆつくり目を通すから!!

盆休みぐらいゆつくりさせてくれ」

マコはオーソドックスな硬いもろこしが好きだけど

あたしや、このしつとりクッキー張りの、生もろこし

大好きなんだよね♪ 週末には芋ようかんとアン玉も届くしね！

スイーツ三昧、いやっほう！」

しばしのお休みを楽しみながら、次の案件を頭の片隅に置いて  
映画鑑賞しながら、対策を練ろうとしていたおばあであった。

## 夏風邪舞台

「いやあ・・・まいったのお。」

太郎寝込んでしまったよ・・・」

今年の猛暑で体温調整がうまくいかなかったせいか  
キジムナーが倒れてしまった。

「太郎、大丈夫かい？ニンニクスープ作っておいたからね。」

好きな時に飲みなさい」

「おばあ、ありがとう・・・まだ食欲ないよ」

「あい、めずらしいねえ・・・いつも黒ヤモリとか喜んで

食べちゃうのにねえ・・・すももあるけどどう？」

「うん・・・もうひと眠りしたら、フルーツなら大丈夫そう」

「冷蔵庫に冷やしてあるから、欲しい時言つて。」

もってきてあげるから」

「ありがとう」

「さて・・・次の案件対策でも考えておくか。」

【案件B576839：名声に重きを置き家族を顧みなかった古典俳  
優】

プランBかあ・・・家族を顧みなかったねえ・・・最近こうい  
うの

多いよね。これってさ、あたし一人でも大丈夫じゃね？

マコに太郎を看病させて、ボディガードには孫ろっくーをキティ  
ちゃん金萬で釣って

連れてけば大丈夫じゃね？ちよつと連絡してみようかのお」

おばあは、案件事案に目を通し、対策を練った。たいして複雑でも  
なさそうなので

妖怪孫ろっくーを連れて行けば、大丈夫だと判断した。

『太郎、ろっくー連れて行つてくるから、心配しないでゆっくりお休  
み』

置手紙を書いて、おばあはろっくーと共に出発した。姪のエン・マ  
コは

すぐに飛んできて、キジムナーの看病をしてくれた。

「さてさて、古典俳優さんとやらにお目にかかろうかのお。

おい、孫ろつくーや、舞台裏に行ってきたおくれ」

「え？やーだよ。なんで、俺がいかなきやいけねーの」

「おまえっ！バイト引き受けたんだろ？言うこときけや」

「ついてくるだけでいーつつただろー」

「まったく、使えない男だねえ。太郎とは雲泥の差じゃ。

一応男性俳優の舞台裏だからねえ。こーう見えてもあたし、乙女だから

門前払い食うじやろ？」

「うっせーばあだなあ。つかったよ。行つてくりやーいーんだろ？」

「ひとこと余計なんだよ。おまえは。そんなんだから、いつまでたつても

地竺に行けないんだよ。」

「はいはい、少しは修行の真似事でもしますよ。地竺行けねえと

困るんでね。この輪っか、邪魔で仕方ねえ」

「頼んだよ。OKでたらすぐに、わしも行くから」

「りよ」

舞台裏に素早く移動すると、孫ろつくーは古典俳優と話をして

おばあの元に戻ってきた。

「なんでもよ、もうひと舞台こなして、舞台上でくたばりてえんだと。」

「はあ？なにそれ。最後まで俳優したいわけ？家族顧みないで

反省してんじやないの？ひっそり最期を迎えたらいいじゃん」

「なんだかわかんねーけどよ、そう言つてっから、ちよつと待てだとか」

「めんどいねえ。じゃ、まんじゅうでも食べて待つてるか。

ほい、これ、お前の分」

「あざっす！まんじゅう大好物でさあー！」

楽屋裏で待機する、おばあと孫ろつくー。拍手喝さいが聞こえてく

る。  
どうやら第二幕が始まったようだ。